

# 総社桜ヶ丘遺跡

1985

前橋市教育委員会  
前橋市埋蔵文化財調査団

## 序

前橋の地は、赤城山、榛名山を後背として関東平野の北西部に位置し、利根川が北から南東にぬけて貫流しており、四季おりおり山の姿が変化し風光明媚な地です。

前橋市域には、700余基もの古墳があり、この地が古代東国文化の中心地として繁栄したことと物語っている。

こうしたすぐれた古墳文化を基盤として律令体制の中にあっては、元総社の地が国府の所在地となり山王庵寺、国分寺等が建立され上野国の政治の中心地となり仏教文化の華が咲きほこった。

特に、本地域の周囲において国史跡の宝塔山古墳、蛇穴山古墳、総社二子山古墳、吉岡村の南下古墳群に近く古代から近・現代までの歴史的遺構が群在している。

このたびこのような歴史的環境のはば中間点に近い総社町桜ヶ丘の地に民間宅地開発分譲計画に伴い種々の協議・調整の結果発掘調査を実施することになったものである。

調査の結果、学術的にも貴重な二ツ丘墳出のF・A層を切りこんだ住居跡を初め烟跡等が発見されている。このことは、物心両面からの援助、協力をいただいた(株)コイデ玩具に厚くお札を申し上げます。

また、山武考古学研究所をはじめ御指導、御協力いただいた関係者、作業員の方さんに厚くお札を申し上げます。

本報告書が斯学の発展のため少しでも寄与できれば幸いと存じます。

昭和60年3月1日

前橋市埋蔵文化財発掘調査團  
團長 奈良三郎

## 例 言

1. 本書は前橋市総社町桜ヶ丘の宅地造成計画に伴う事前発掘調査の報告書である。
2. 発掘は前橋市教育委員会指導のもと山武考古学研究所が担当し、現地調査は同研究所職員折原洋一が行なった。
3. 遺跡の所在地及び調査期間は下記の通りである。

所在地 群馬県前橋市総社町桜ヶ丘1037他

調査期間 昭和60年6月4日～7月12日

4. 本書の遺物・図面の整理は折原洋一が担当し、平山史子、片岡美枝子、根本時子に協力を得た。本書の執筆は第1章を福田紀雄が、他を折原洋一が行なった。
5. 本書の編集は折原洋一が行ない平岡和夫が総括した。
6. 発掘調査から本書刊行に至るまで、下記の機関、諸氏の御指導、御助言を賜った。記して感謝の意を表す次第であります。

群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、県小出玩具、前橋市宅地開発事前協議会

7. 発掘調査参加者（敬称略アイウエオ順）

原沢らく 岡田カツ子 小野里良子 小柴マツ子 佐藤ハル 新保一美 須藤マツ江

住谷文彦 千明香根子 福室良子 水野キクエ 森田久子

## 凡 例

1. 本遺跡は前橋市教育委員会遺跡略称のA5である。
2. 遺構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。

全体図1/400 住居跡・土塙1/60 溝1/160 土器1/3 石器1/3 石器の一部 古銭1/2

3. スクリントーンは次の通りである。

遺物 黒色処理 ■■■ 灰釉 ■■■ スス付着 ■■■

遺構 焼土 ■■■ F A層 ■■■

## 目 次

第1章 調査に至る経過.....	1
第2章 位置と環境.....	2
第1節 自然環境.....	2
第2節 歴史環境.....	2
第3章 調査の方法.....	5
第1節 調査の方法.....	5
第2節 標準土層.....	5
第3節 調査日誌.....	5
第4章 遺構・遺物.....	7
第1節 遺構の概観.....	7
第2節 住居址.....	8
第3節 土塹.....	39
第4節 溝.....	39
第5節 獣状遺構.....	41
第6節 調査区内の遺物.....	41
第5章 まとめ.....	42

## 挿図目次

第1図 桜ヶ丘遺跡とその周辺	3	第21図 6号新住居址出土遺物実測図・拓図	
第2図 桜ヶ丘遺跡位置図	4		25
第3図 標準土層図	5	第22図 6号古住居址実測図	26
第4図 遺跡全体図	7	第23図 6号古住居址出土遺物実測図・拓図	
第5図 1号住居址実測図	9	(1)	27
第6図 1号住居址出土遺物実測図・拓図(1)	10	第24図 6号古住居址出土遺物実測図(2)28	
第7図 1号住居址出土遺物実測図(2)	11	第25図 7号住居址実測図	29
第8図 1号住居址出土遺物実測図(3)	12	第26図 7号住居址カマド実測図	30
第9図 1号住居址出土遺物実測図(4)	13	第27図 7号住居址出土遺物実測図・拓図(1)	
第10図 2号住居址実測図	15	第28図 7号住居址出土遺物実測図(2)	32
第11図 2号住居址出土遺物実測図・拓図	15	第29図 8号住居址実測図	33
第12図 3号住居址実測図	16	第30図 8号住居址出土遺物実測図・拓図	
第13図 4号新住居址実測図	17	第31図 9号住居址実測図	34
第14図 4号新住居址出土遺物実測図・拓図	18	第32図 9号住居址出土遺物実測図	34
第15図 4号古住居址実測図	19	第33図 10号住居址実測図	35
第16図 4号古住居址出土遺物実測図・拓図	19	第34図 10号住居址出土遺物実測図・拓図	
第17図 5号住居址実測図	20	第35図 11号住居址実測図	38
第18図 5号住居址出土遺物実測図・拓図(1)	21	第36図 12号住居址断面図	38
第19図 5号住居址出土遺物実測図(2)	22	第37図 3号土塁実測図	39
第20図 6号新住居址実測図	23	第38図 1・2号溝、畝状遺構実測図	40
		第39図 溝出土遺物実測図・拓図	41
		第40図 調査区内出土遺物	41

## 表目次

表1	1号住居址出土遗物(1).....	10
表2	1号住居址出土遗物(2).....	13
表3	2号住居址出土遗物.....	14
表4	4号新住居址出土遗物.....	18
表5	4号古住居址出土遗物.....	18
表6	5号住居址出土遗物(1).....	21
表7	5号住居址出土遗物(2).....	22
表8	6号新住居址出土遗物.....	24
表9	6号古住居址出土遗物.....	28
表10	7号住居址出土遗物.....	30
表11	8号住居址出土遗物.....	33
表12	9号住居址出土遗物.....	35
表13	10号住居址出土遗物.....	36

## 図版目次

図版1-1 発掘終了状況	図版11-1 8号住居址完掘状況
-2 1号住居址完掘状況	-2 8号住居址カマド
図版2-1 1号住居址カマド遺物出土状況	図版12-1 9号住居址完掘状況
-2 1号住居址カマド完掘状況	-2 10号住居址完掘状況
図版3-1 2号住居址完掘状況	図版13-1 10号住居址カマド完掘状況
-2 2号住居址カマド	-2 11号住居址
図版4-1 3号住居址完掘状況	図版14-1 12号住居址
-2 3号住居址カマド	-2 3号土器
図版5-1 4号新住居址完掘状況	図版15-1 1号溝
-2 4号古住居址完掘状況	-2 2号溝
図版6-1 4号古住居址カマド完掘状況	図版16 1・2号住居址土器
-2 5号住居址完掘状況	
図版7-1 5号住居址カマド	図版17 4号新・古住居址、5号住居址
-2 6号新住居址完掘状況	6号新住居址土器
図版8-1 6号新住居址新カマド	図版18 6号古住居址・7号住居址土器
-2 6号新住居址古カマド	
図版9-1 6号古住居址完掘状況	図版19 9・10号住居址土器
-2 6号古住居址カマド完掘状況	
図版10-1 7号住居址完掘状況	図版20 石製品・鉄器
-2 7号住居址カマド	

## 第1章 調査に至る経過

58. 12. 27 備コイデより前橋市総社町桜ヶ丘1037地（2.959m<sup>2</sup>）で宅地造成計画書は提出される。前橋市宅地開発事前協議会より意見書の提出方の依頼がある。
59. 1. 5 現地、表面調査、地形調査、実施する。
59. 1. 12 現地調査により土師器の散布、周囲の歴史的環境等により遺跡地の可能性大である。開発に先立ち発掘調査が必要であると回答する。（土地所有者及び建築指導課）
59. 1～2 埋蔵文化財の取り扱いについて、土地所有者、代理人、前橋市教育委員会と協議する。
59. 2. 14 土地所有者、代理人、前橋市教育委員会と協議、調整をする。  
その結果、市文化財保護係専門職員立ち会いのもとで試掘調査を実施することと合意する。  
費用負担、重機、作業員の手配については原団者が責任をもつ。
59. 2. 16 試掘調査依頼申請が提出される。
59. 2. 19 試掘調査予定日であったが降雪のため後日延期とし、調査日を再度協議する。  
2月25日とする。
59. 2. 25 開発予定地内に巾1m、長さ10mのトレンチを8ヶ所設定し試掘調査を実施する。開発予定地の東側の部分から平安時代の住居跡、カマド等が発見される。  
西側の部分は、工場造成時（昭和30年代）に削平されており数cmでローム面になり遺構は確認されなかった。
59. 3. 6 宅地開発前に発掘調査を実施する事の回答する。
59. 4～5 調査主体者、調査期日等について協議する。
59. 6. 2 埋蔵文化財発掘調査依頼が前橋市教育委員会に提出される。  
(調査主体者を前橋市埋蔵文化発掘調査団とする)

(福川)

## 第2章 位置と環境

### 第1節 自然環境

本遺跡は国鉄総社駅より北へ1.5km程度行った総社町桜ヶ丘1037に所在する。総社町周辺は利根川西岸の榛名山東麓から前橋台地への移行部にあたっており、台地状を成している。この台地を牛王頭川、八幡川などの中小河川が東南方向に流れ、台地を細長く分断している。これらの河川の内、牛王頭川は榛名山東麓に源を発し、東南方向に流路を取り、下流部では利根川に流れ込んでいる。本遺跡はこの牛王頭川下流と利根川に狭まれた舌状台地上に位置する。この舌状台地は高燥な土地で、かつては桑畠となっていた。

調査区は利根川に面した舌状台地の東部で、利根川まで約150mの距離にある。また、調査区内にはほぼ平坦であるが、わずかに東に向ってゆるやかな傾斜をもっている。なお、調査区の北方はゴルフ練習場がかつて存在したため、現状では大きく削平を受けており、地表にF八崩が露出している。削平以前はさらに高くなっていたと考えられ、調査区内も旧地形ではもう少し傾斜のあった斜面だったと思われる。

### 第2節 歴史環境

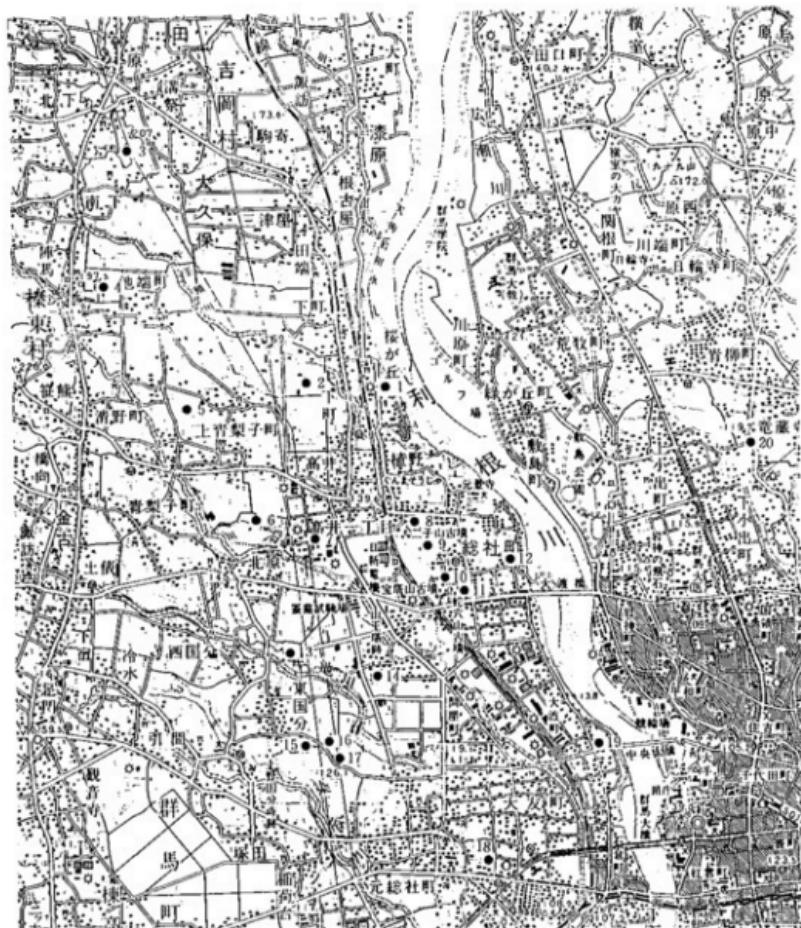
本遺跡周辺には縄文時代から平安時代にかけての多数の遺跡が存在する。また、これらの遺跡は集落跡から上毛野国衙、あるいは県内有数の古墳群というように多種多様に亘っている。

縄文時代では、下東西、清里陣場、庚塚、国分境の各遺跡で若干の遺物が出土しており、時期的には前期～後期に想定する。また、国分寺中間地域遺跡において前期の住居址1軒、中期の住居址20軒が検出されている。

弥生時代では清里・陣場遺跡で環濠集落跡が、国分寺中間地域遺跡で方形周溝墓が、下東西遺跡で住居址が検出されている。また、本発掘調査区南方の同一台地上においても後期に属する住居址が検出されている。

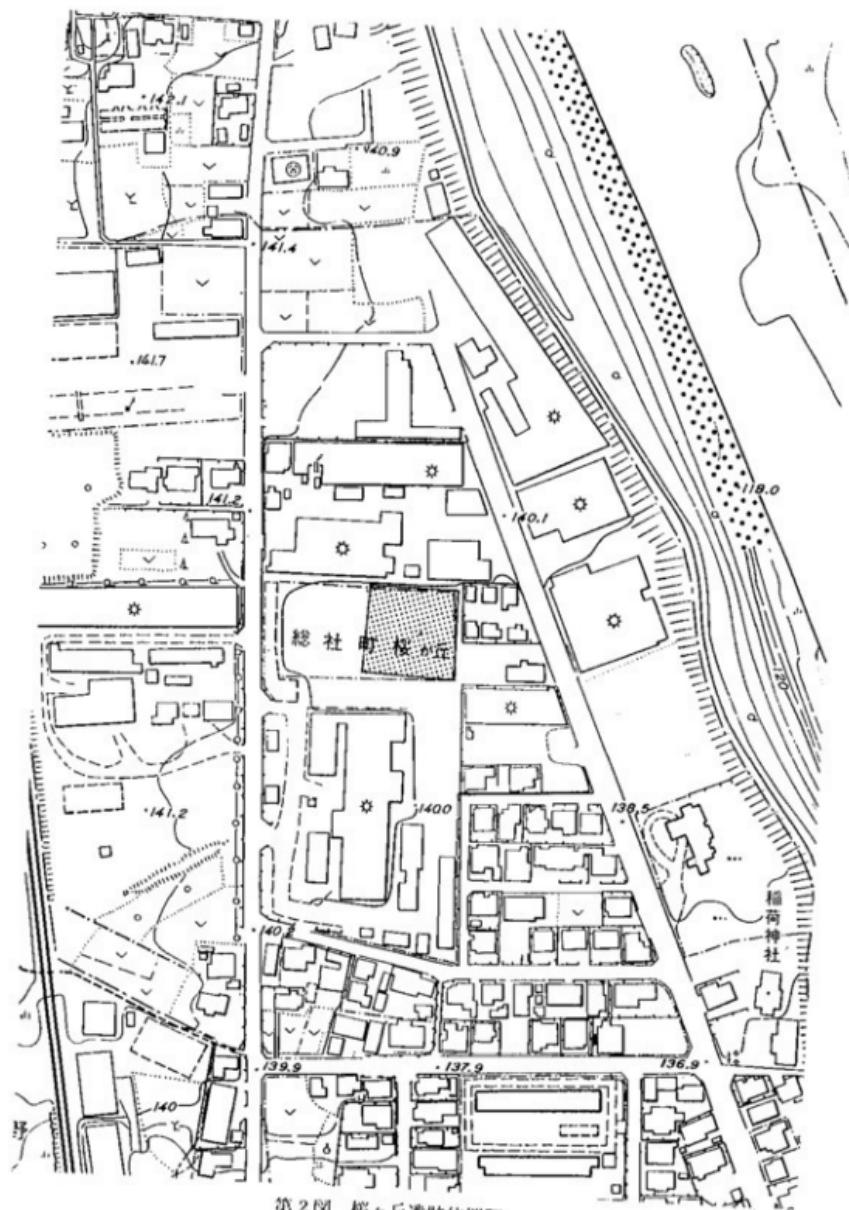
古墳時代には県内でも有数な古墳群である総社古墳群が存在する。総社古墳群は本遺跡と牛王頭川の谷を狭み対岸に存在し、二子山古墳をはじめとして終末期の古墳である宝塔山古墳や初現期の横穴石室をもつ王山古墳がある。牛王頭川上流には南下古墳群が存在する。

奈良・平安時代になると本遺跡の南方の総社町を中心として大きく発展し、上毛野国の中核機関である上毛野国府跡、上毛野国分僧寺跡、上毛野国分尼寺跡、山王院寺跡が出現する。これにともなって周辺に大規模な集落跡が出現する。調査された遺跡として、下東西、国分寺中間地域、柿木、国分境、青柳寄居遺跡などがある。また、牛王頭川の上流には本遺跡とはほぼ同時期の集落跡である清里・陣場遺跡が存在している。



1櫻が丘遺跡	2長久保遺跡	3南下古墳群	4清里陣場遺跡
5庚塚遺跡	6下東西遺跡	7桜木遺跡	8二子山遺跡
10宝塔山古墳	11蛇穴山古墳	12見送山古墳	13国分境遺跡
14山王寺跡	15国分寺跡	16国分寺中間地遺跡	17日分寺
18上毛野田村	19玉山古墳	20青柳寄居遺跡	

第1図 桜ヶ丘遺跡とその周辺



第2図 桜ヶ丘遺跡位図

## 第3章 調査の経過

### 第1節 調査の方法

本調査は前橋市教育委員会によって行なわれた試掘調査に基づき発掘範囲を決定した。発掘範囲は造成地域の東部、約1,000m<sup>2</sup>を対象とした。

発掘調査を行なうにあたって、調査区全域に10m四方のグリッドで割り付け区分した。グリッドの呼称方法は東西方向を北端よりアルファベットでa・b……、南北方向を東端より算用数字で1・2……とし、各グリッドの東北の交点を基点とした。

住居跡の調査は覆土に十字のセクションを設けて上層観察を行なうようにした。出土遺物は極力その分布状況を記録するようにしたが、10号住居址は調査期間終了間際のため、覆土中の遺物は一括して取り上げざるを得なかった。図面は造構平面図を1/20、カマド平面図を1/10、全休図を1/200とした。

### 第2節 標準土層

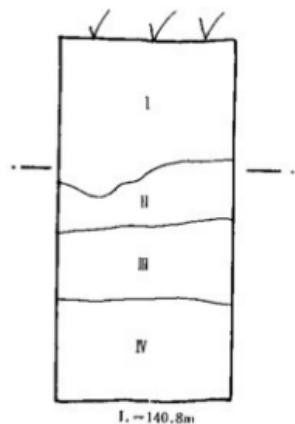
本遺跡では第Ⅰ層から第Ⅳ層までの標準土層を確認した。各層は次の通りである。

第Ⅰ層 暗褐色土。粘性、締りともに悪い。

第Ⅱ層 黄褐色のFA層。

第Ⅲ層 黒色土。白色の輕石(Φ2~5mm)を多量に含む。粘性はたいへん不良で、締りは良好である。

第Ⅳ層 黒褐色土。Φ1mm以下の白色粒を多く含む。粘性、締りともに良好である。



第3図 標準土層図

### 第3節 調査日誌より

本遺跡は昭和59年6月4日から7月12日までの期間調査を行なった。

6月4日 機材の導入および現地で、発掘調査の打ち合せ。

5日 現場事務所の整理を行なう。

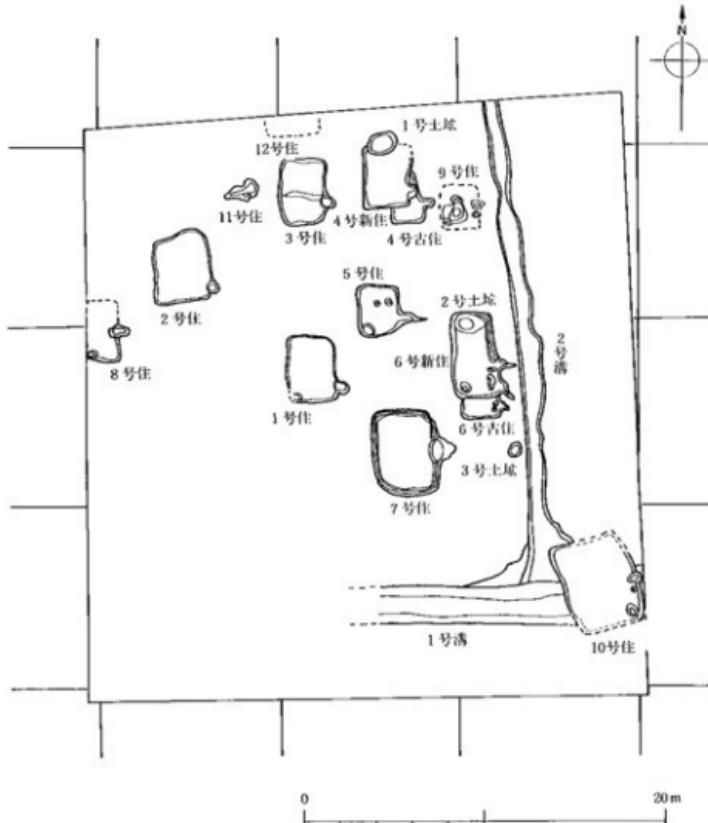
6日 表土除去を開始。FA層上面を確認面とする。遺構確認開始。

- 7日 表土除去作業および造構確認を継続する。住居址のプランを検出。
- 8日 表土除去作業および造構確認。
- 9日 表土除去作業終了。
- 11日 造構確認作業終了。
- 12日 造構確認状況の全景写真を撮影。グリッド・ポイントの設定開始。1号住居址調査開始。
- 13日 グリッド・ポイント設定終了。
- 14日 2号、3号住居址調査開始。
- 15日 4号新住居址調査開始。1号住居址セクション図作成。
- 16日 2号、3号住居址掘り下げ終了。
- 18日 1号住居址遺物出土状況写真撮影。5号、7号、6号新住居址調査開始。
- 19日 2号、3号住居址遺物出土状況実測。
- 20日 2号溝調査開始。3号住居址完掘状況写真撮影。
- 21日 雨のため室内整理。
- 22日 雨のため室内整理。
- 23日 雨のため室内整理。
- 25日 1号住居址遺物取り上げを行なう。平面図作成。
- 26日 4号新住居址遺物取り上げ、平面図実測。
- 27日 5号住居址調査開始。
- 28日 4号古住居址、6号古住居址調査開始。
- 29日 4号古住居址平面図作成。
- 30日 6号古住居址遺物取り上げを行なう。
- 7月2日 破壊状造構調査開始。
- 3日 8号住居址調査開始。5号住居址調査終了。
- 4日 破壊状造構調査終了。
- 5日 8号住居址調査終了。
- 6日 11号、12号住居址調査開始。
- 7日 9号住居址調査終了。
- 9日 1号溝調査開始。7号住居址調査終了。
- 10日 1号溝調査終了。
- 11日 10号住居址平面図作成、完掘状況写真撮影。
- 12日 全体図作成。本日をもって調査終了する。

## 第4章 遺構・遺物

### 第1節 遺構の概観

本調査において確認された遺構は平安時代の住居址14軒、土塙3基、中世以後の溝2条、近世以後の畝状遺構1である。確認面は全てFA（標準土層第II層）である。遺構・遺物とともに調査区の北東部に集中しており、南西には無い。また、調査区の周囲には著しく搅乱が見られており、調査した住居址の中にも削平を受けているものが確認できた。特に調査区の東辺と北辺が著しく、消失している遺構も存在したと思われる。



第4図 遺跡全体図

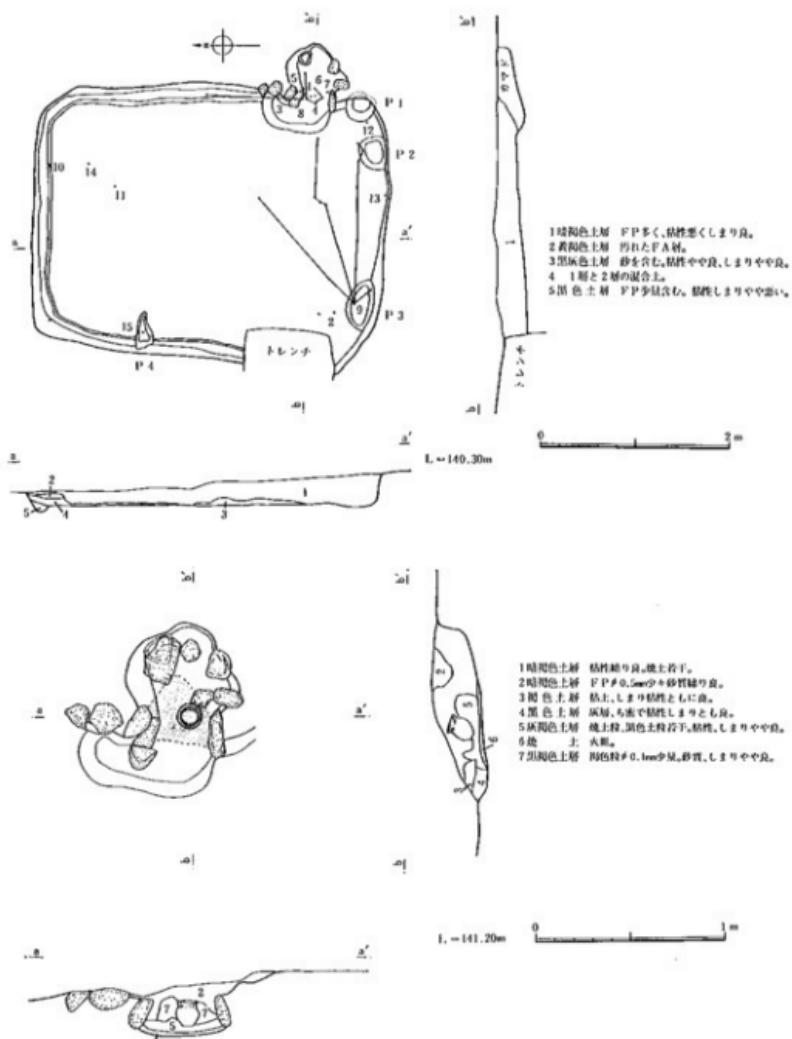
## 第2節 住居址

### 1号住居址（第5図、図版1-2、2-1・2）

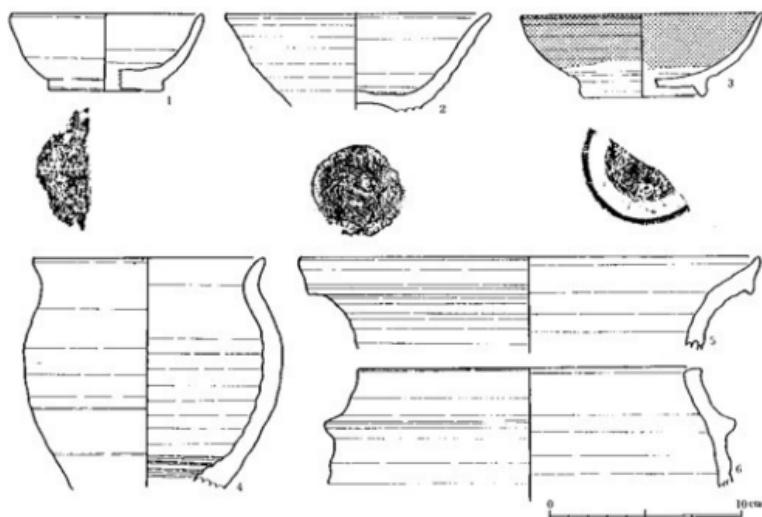
本住居跡は調査区中央部のb-2区に位置し、約2m北東に5号住居址が、約2m南東に7号住居址がそれぞれ存在する。本住居址はすでに試掘調査段階でその存在が予想されており、発掘調査の端緒となった住居址である。なお、試掘トレンチにより住居址西壁と床面の一部が削平されている。確認面は標準土層第Ⅱ層である。平面形を南北3.7m、東西2.9mの南北に長い、長方形を呈し、主軸方向はN-90°-E、コーナーは隅丸である。横は南壁が他の壁よりも残りが良く、確認面までの高さが約35cmを測り、ほぼ直立して立ち上がる。床面は標準土層第Ⅲ層を掘り込んだまで、貼床は認められない。また、床面の硬度は全体的にやや軟弱と言える。周溝は南壁を除き、他の3壁に巡っており、断面の形態は幅15cm、深さ約5cm程度のU字形を呈す。貯蔵穴状の土塙は南壁に接してP<sub>1</sub>-P<sub>3</sub>が検出されている。P<sub>1</sub>は南東コーナーに存在する。形態は径30cmの円形を呈し、床面より深さ18cm、壁面の東部はオーバハンジとなる。P<sub>2</sub>は南壁東部に位置し、P<sub>1</sub>との距離15cm程度である。形態は径30cmの円形を呈し、深さ18cm程度である。P<sub>3</sub>は南壁西部に位置する。形態は長径55cm、短径30cmの楕円形を呈し、深さ12cm程度の皿状を呈す。この他の土塙として、西壁に接してP<sub>5</sub>が検出されている。形態は長径35cm、短径18cmの三角形を呈し、深さ15cm程度である。

カマドは東壁南部に付設されており、石組みにより構築されている。構築材は河原石を主体とし、一部に榛名山噴出の浮石安山岩を使用している。これらの構築材はカマド覆土、およびカマド周辺より比較的多く出土していることから、カマドの壁体および天井は全て石材で構築されていたと考えられる。掘方は壁外に幅45cm、長さ70cmに掘り込んでいる。焚口部は内法が30cm、前面には長径70cm、短径25cm、深さ4cmの浅い土塙がある。燃焼部はやや傾斜をもち、焼土化しており、中央部に支脚代用の須恵器壺が出土している。煙道部は燃焼部よりゆるやかな傾斜もって立ち上がるが、先端が急傾斜となっている。

遺物は覆土および床面から多数出土している。特に土器類はカマドから住居址南部にかけて集中していり、石製品と石材は住居址北東の覆土に集中する。1・4-8はカマド内より出土している。2は床面より正立して出土している。3はカマド内および周溝内より出土しており、さらに6号新住居址の覆土の灰釉陶器片1点と接合している。9はP<sub>3</sub>の覆土から床面上にかけて多くの破片が集中したが、この東方の覆土中の破片とも接合している。10は周溝覆土の床面とほぼレベルより出土している。11はほぼ床面より出土し、12は床面より出土し、P<sub>1</sub>の上部を覆っている。13はほぼ床面より出土している。14は若干床面より浮く状態で出土している。15はP<sub>4</sub>覆土上面より出土している。



第5図 1号住居址実測図

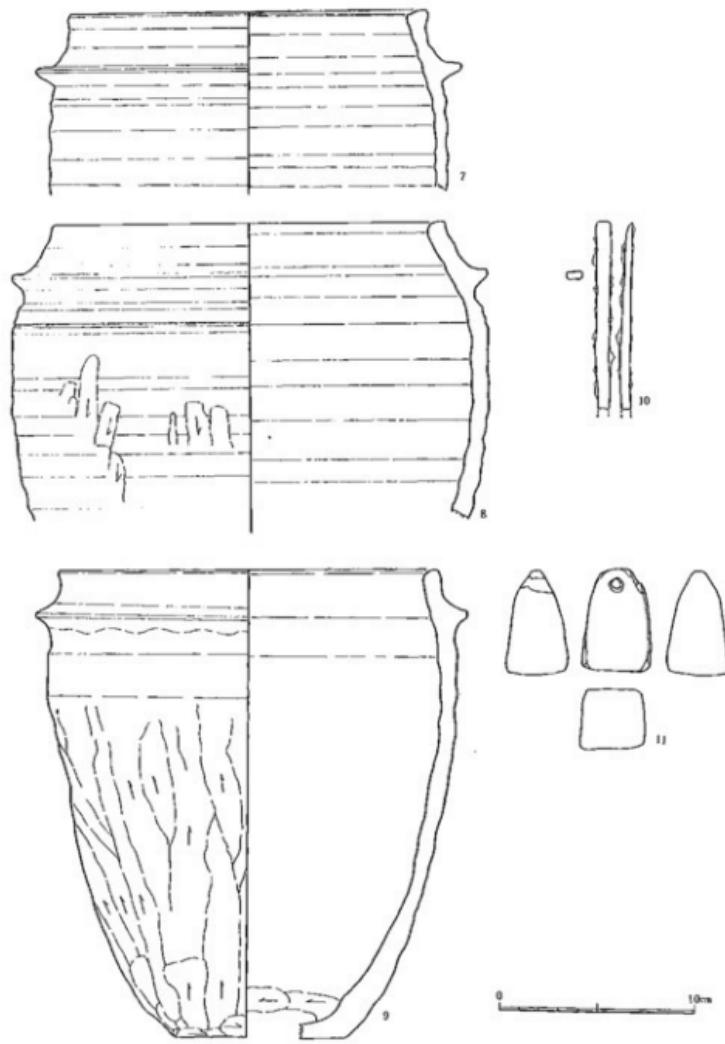


第6図 1号住居址出土遺物実測図・拓図(1)

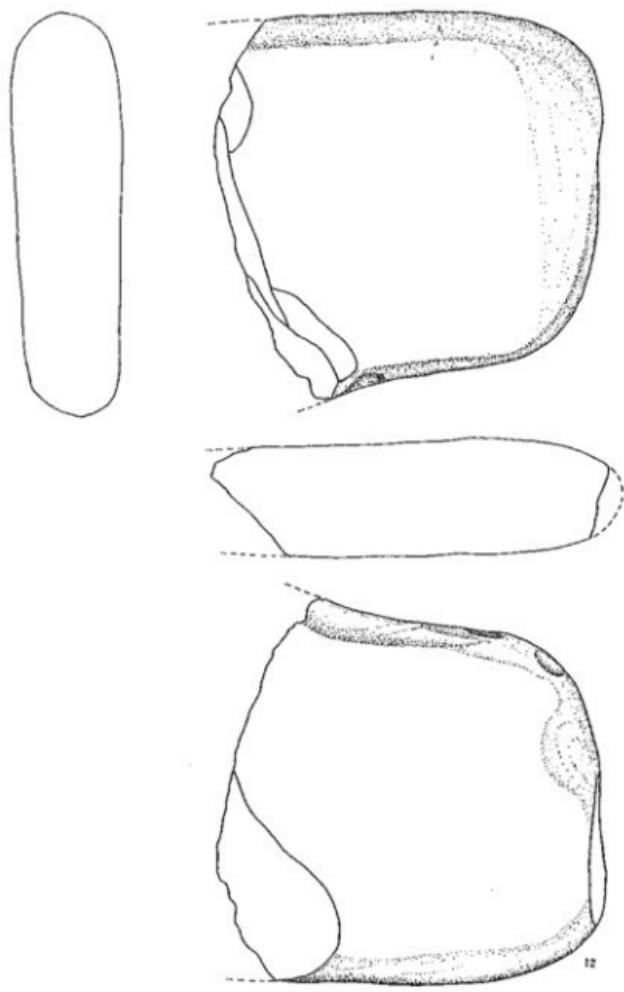
表1 1号住居址出土遺物(1)(第6・7図、図版16)

(単位cm)

番号	器種	法量	器形の特徴	外面の整形	内面の整形	備考
1	土師器 环	10.0 4.1 6.0	突出した底部。全体に若干の段。	底部糸切り未調整。 ロクロ整形。	ロクロ整形。	①内外面とも赤褐色②やや不良③④砂質⑤器面が荒れている。
2	土師器 塊	14.0 — —	高台付。口縁部外反。	底部回転糸切り未調整。右回転ロクロ整形。	右回転ロクロ整形。	①内外面とも褐色②良好③高台部少掛④疊を少し含む⑤内外面にスス付着
3	灰釉 塊	12.8 4.4 6.2	高台部端に丸味をもつ。口縁部心持外反。	底部回転糸切り未調整。ロクロ整形。	ロクロ整形。	①内外面とも灰白色②良好③④密つけ釉付高台。
4	須恵器 甕	12.1 — —	口縁部ゆるやかに外反。	右回転ロクロ整形。	右回転ロクロ整形。	①内外面とも灰白色②外面部酸化内面環元③底部少掛④密
5	須恵器 甕	— — —	口縁部下端三角に突出。	ロクロ整形。	ロクロ整形。	①内外面とも赤褐色②酸化③口縁部少掛④疊多い。
6	羽釜	18.0 — —	口縁部内湾。鉗は短く丸味をもつ。	ロクロ整形。	ロクロ整形。	①内外面とも明赤褐色②酸化③口縁部少掛④疊多し
7	羽釜	18.6	内湾する口縁部。やや上向きの鉗。	ロクロ整形。	ロクロ整形。	①内外面とも暗褐色②酸化③口縁部少掛④疊多しスス付着

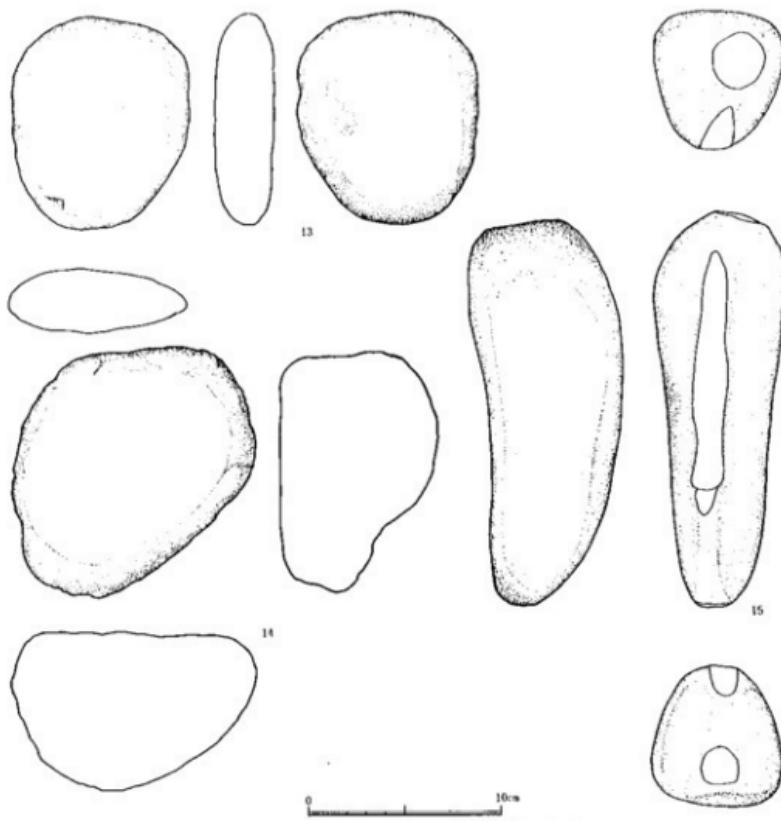


第7図 1号住居址出土遺物実測図(2)



0 1 10cm

第8図 1号住居址出土遺物実測図(3)



第9図 1号住居址出土遺物実測図(4)

表2 1号住居址出土遺物(2)(第7・8・9図、図版16・20)

(単位cm)

番号	器種	法量	器形の特徴	外面調整	内面調整	
8	羽釜	20.2 — —	口唇部や丸い。 やや上向きの鈎。	石回転ロクロ整形 後、上から下への削り。	石回転ロクロ整形。	①色調②焼成③残存④ 胎⑤瘤等
9	土師器釜	19.8 24.4 8.9	口縁部直立気味、 口唇部丸い。三角形の鈎。	口縁部横撫で後、 下から上への削り。 底部削り。	口縁部横撫で。 銅部撫で。	①内面黒褐色、外面暗 褐色②酸化③銅上部ノ 欠損④瘤多し⑤粘土組 づくり、スヌ付着
10	鉄器	細い鑿状工具である。幅8mm、厚さ4mmの長方形の断面をもち、丸い切刃である。				
11	砥石	小形の砥石で、基部に小孔をもつ。通常の砥石を半分に折り、再利用している。				
13	台石?	表面両面ともに磨滅しており、やや光沢をもつ。				
14	台石?	表面両面ともに磨滅しており、光沢をもつ。				
15	磨石	表面の平坦面が真く磨滅している。				
16	印石	上下両端および背面に打痕をもつ。				

## 2号住居址（第10図、図版3-1・2）

本住居址は調査西北部のa-3区に位置し、北東へ2mに11号住居址、南西へ2mに8号住居址がそれぞれ存在する。確認面は標準土層第Ⅱ層で、住居址北西部は削平を受けており、標準土層第Ⅲ層となっている。平面形は南北4.1m、東西3.3mのやや不整な台形を呈し、主軸方向はN-83°Eである。壁は全体的に削平を受けており、確認面より最大10cm程度である。床面は標準土層第Ⅳ層下部から第V層上面にかけて構築されており、部分的にF-A層（標準土層第Ⅲ層）が敷きつめられたような状況が認められる。また、住居址東北部の床面上には焼土の堆積が部分的に検出されている。床面の硬度は全体的に軟弱である。周溝・柱穴等は存在しなかった。

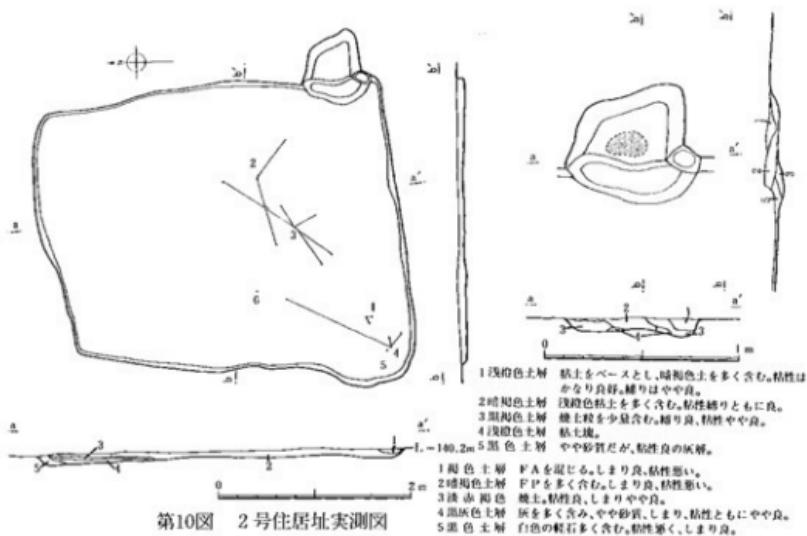
カマドは東横南部に設置されている。形態は壁外に幅60cm、長さ40cmに不整形形状に掘り込んでおり、その前面に20×65cm、深さ4cm程度の土塹をもつ、この掘方内より石材の出土は認められない。燃焼部は掘方中央部に焼土が存在することより、住居址壁外に存在したことが認められる。この点より袖はあまり発達しておらず、さらに本住居址と同一時期の住居址が石組みのカマドであることから本カマドも同様な構造と思われる。

遺物は床面もしくは若干浮いた状況で出土している。全て小破片で、住居址南西部とカマド内に集中している。北西部は削平を受けたためか全く出土していない。1~6まで全ては床面より出土している。1は住居址西北部より出土しているが、この他同一個体と考えられる細片（接合できなかった）が周辺に散在している。2と3は遺物の最も集中する部分より出土し、各破片は飛び散った状態で出土している。4は2と3同様に各破片が飛散した状況で出土しており、周辺には遺物の集中が見られる。5と6はともに床面より出土している。

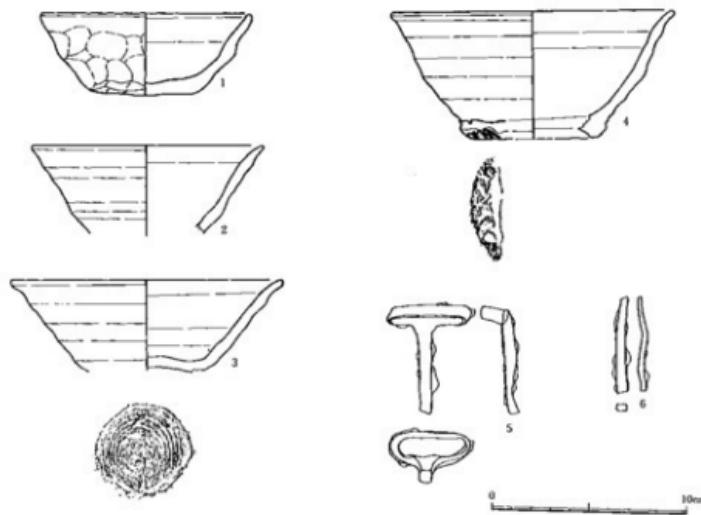
表3 2号住居址出土遺物（第11図、図版16・20）

(単位:cm)

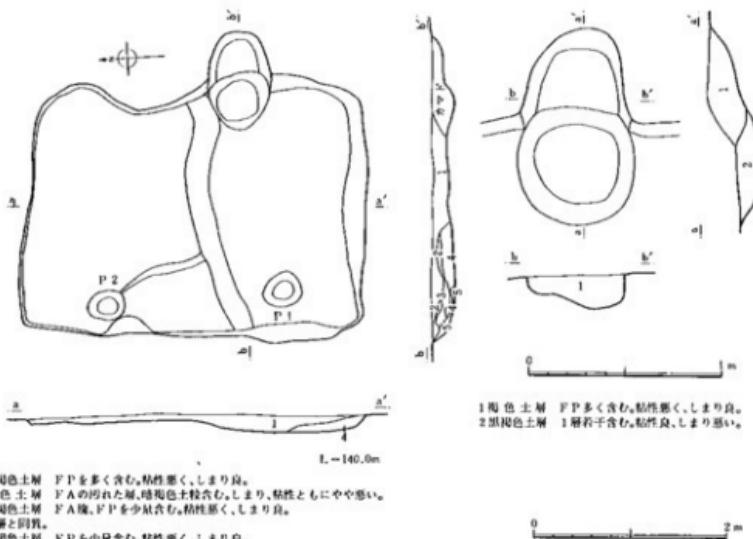
番号	器種	法量	器形の特徴	外面の調整	内部の調整	
1	土師器 环	10.8 4.3 5.8	不安定な平底。や や内凹する口縁部 底部削り。体部指 頭による調整。L.I. 縁部横撫。	撫で。	撫で。	①赤褐色②やや不良③ 另④疊を含む。
2	須恵器? 环	12.0 — —	若干外反する口縁 部。	ロクロ整形。	ロクロ整形。	①浅黄褐色②酸化軟質 ③口縁部另④疊を多く
3	須恵器 碗	14.2 — —	外反する口縁部。 高台。	ロクロ整形。 底部回転糸切り末 調整。	ロクロ整形。	①灰~灰白色②環元軟 質③口縁部另欠損④や や砂質⑤かなりいびつ。
4	須恵器? 碗	14.4 6.7 6.4	玉縁状の口縁部。 つぶれた高台。	ロクロ整形。 高台に「ハ」字状の 刻目。	ロクロ整形。	①褐色~黒色②やや不 定③口縁部另④疊多し
5	鉄器	用途不明。	格子形のリング状部分に断面方形の棒状部が付加されている。			
6	鉄器	用途不明。	長方形の断面をもち、中程で波状となる。			



第10図 2号住居址実測図



第11図 2号住居址出土遺物実測図・拓図



第12図 3号住居址実測図

### 3号住居址（第12図、図版4-1、2）

本住居址は調査区西部のa-2区に位置し、東へ約2mに4号新・古住居址、西へ約1mに12号住居址がそれぞれ存在する。確認面は標準土層第II層である。平面形は3.54m、東西2.8mの方形を呈す。壁は確認面より最大15cmで、傾斜し立ち上がる。床面は中央部に高さ8cm程度の段が認められ、北半部が高く、南部が低くなっている。床面の硬度は軟弱である。周溝は無く、土塙が西部に2ヶ所存在する。これら土塙は円形を呈し、深さはP<sub>1</sub>が10cm、P<sub>2</sub>が4cmである。

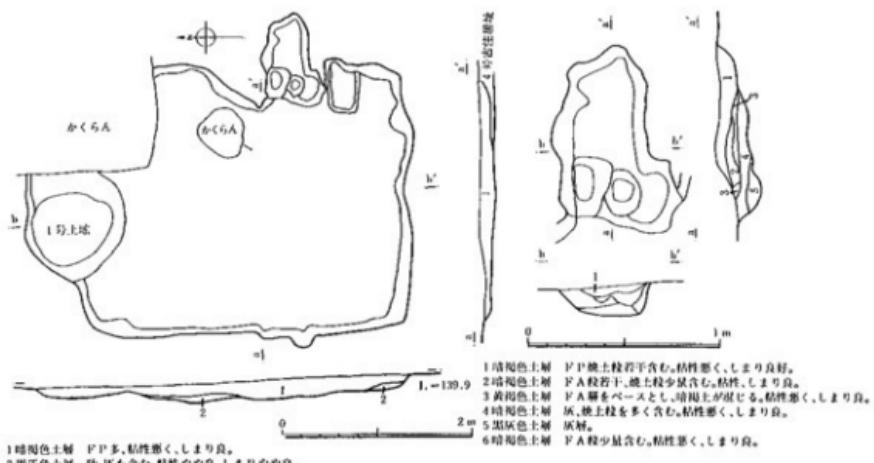
カマドは東壁南寄りに設置されている。壁外へ幅58cm、長さ50cmの半円形に掘り込み、壁内に径60cm、深さ18cmの円形土塙を掘り込む。覆土内には焼土が全く無く、はたしてカマドとして機能したか疑問がもたれる。

遺物は全く出土していない。

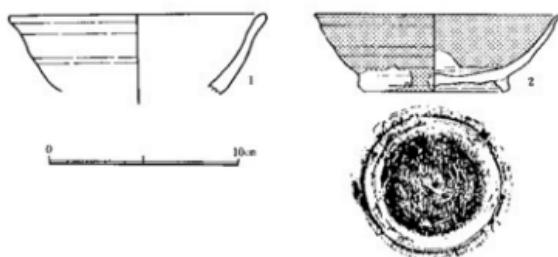
### 4号新住居址（第13図、図版5-1）

本住居址は調査区西部のa-2区に位置し、南東部で4号古住居址を切り、北部で1号土塙により切られており、また住居址北東部は擾乱により削平を受けている。確認面は標準土層第II層である。平面形は南北3.5m、東西2.9mの長方形を呈し、主軸方向はN-90°-Eである。

壁は確認面より16cm程度で、ゆるい傾斜をもって立ち上がる。床面は標準土層第Ⅲ層中に構築



第13図 4号新住居址実測図



第14図 4号新住居址出土遺物実測図・拓図

されており、一部が4号古住居址の覆土を床面とする。床面の硬度はやや軟弱である。貯蔵穴状の土壙はカマドの南側に東壁に接して検出されている。形態は長径56cm、短径34cmの長方形を呈し、深さは床面より22cmを測る。土壙の壁はほぼ直立し、底面は平坦である。周溝・柱穴は検出されていない。

カマドは東壁南寄りに設置されており、4号古住居址の覆土を掘り込み構築されている。カマドの両脇の壁は袖状に突出して掘り残こされており、燃焼部—煙道部は壁外へ幅28cm、長さ35cmに掘り込み構築されている。また、焚口部には石材の抜き取りの痕跡と考えられるピットが認められ、本カマドも石組みと考えられる。

遺物は極めて少なく、カマドおよびその前面に若干出土したにすぎない。1はカマド内より

出土、2はカマド前面の覆土より出土している。

表4 4号新住居址出土遺物（第14図、図版17）

(単位cm)

番号	器種	法量	器形の特徴	外面の整形	内面の整形	備考
1	須恵器 環	13.4 — —	器肉が厚い。口唇部肥厚し、やや外反。	ロクロ整形。	ロクロ整形。	①灰白色②環元状質③ $\frac{1}{4}$ ④疊多く粗
2	灰釉陶器 塊	12.9 4.1 7.4	三月高台。口縁部に段を有し、口唇部強く外反する。	右回転ロクロ整形。 付高台。底部糸切り後、撫で調整。	右回転ロクロ整形。	①褐色色②酸化③口縁部欠損④密⑤口唇部に若干スス、つけかけ

#### 4号古住居址（第15図、図版5-2、6-1）

本住居址は調査区北部のb-2区に位置し、北西部を4号新住居址により切られている。確認面は標準土層第Ⅱ層である。平面形は南北3.1m、東西2.0mの長方形を呈し、主軸方向はN-97°-Eである。壁は北壁の西部から西壁北部にかけて4号新住居址により削平されており、確認面まで高さが8cmで、やや傾斜して立ち上がる。床面は標準土層第Ⅲ層中に構築され、ほぼ平坦である。床面硬度は全体的に軟弱である。周溝・柱穴等は無い。

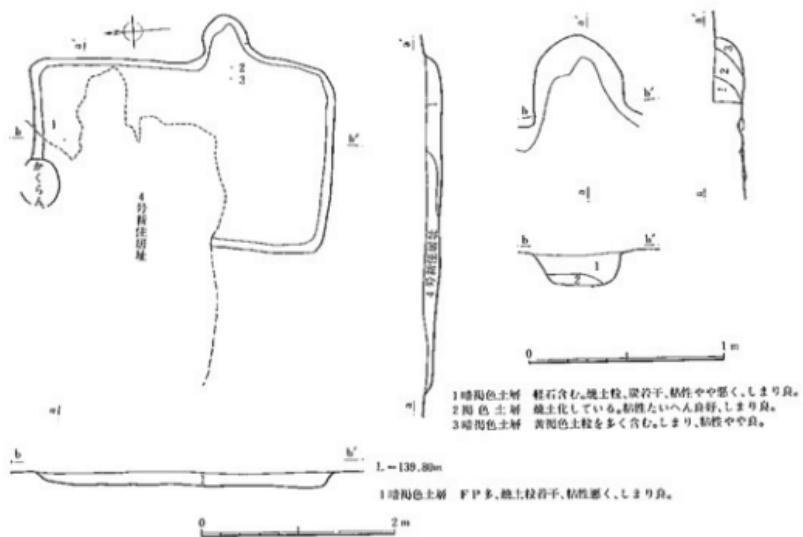
カマドは東壁南寄りに設置されている。石組のカマドと考えられるが、石材の出土は無く、軸方のみ残存している。掘方は壁外へ幅45cm、長さ45cmの規模で半円形の平面をもって掘り込んでいる。燃焼部は床面と同一レベルで平坦である。煙道部は直立して立ち上がる。

遺物は出土量が極めて少なく、カマド前面にやや集まりが認められた。1は住居址北部の床面より出土している。2と3はカマド前面の床面より出土している。

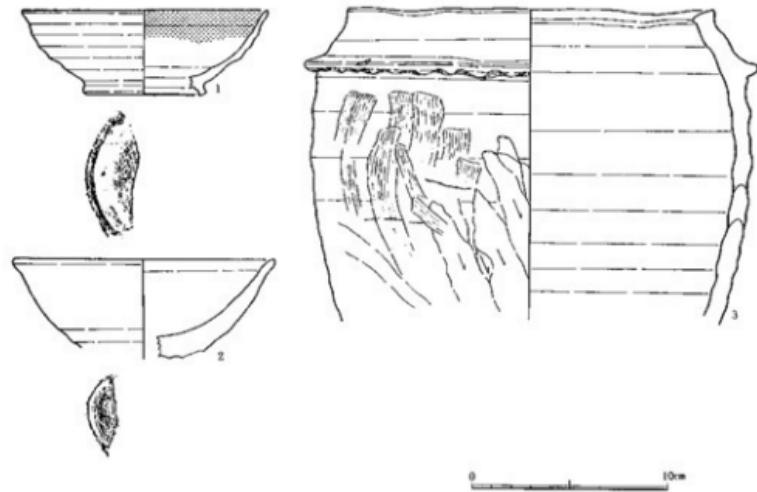
表5 4号古住居址出土遺物（第16図、図版17）

(単位cm)

番号	器種	法量	器形の特徴	外面の整形	内面の整形	備考
1	灰釉 碗	12.8 4.4 6	口縁部外反気味。 三ヶ月高台。	底部回転糸切り後、調整、ロクロ整形。	ロクロ整形	①灰白色②良好③ $\frac{1}{4}$ ④密⑤つけかけ
2	碗	13.6 — —	厚い器内。口縁部外反。	ロクロ整形。	ロクロ整形。	①外面明赤燈色内面暗灰色②酸化③ $\frac{1}{4}$ ④疊多し。
3	剥 釜	18.6 — — —	内湾する口縁部。 丸味の強い剥。	ロクロ整形後、左上から右下への削り、縦位の撫で。 剥貼付後、未調整。	ロクロ整形。	①外面明赤褐色内面暗黄褐色②酸化③ $\frac{1}{4}$ ④密⑤剥の下部に指頭痕が残る。



第15図 4号古住居址実測図



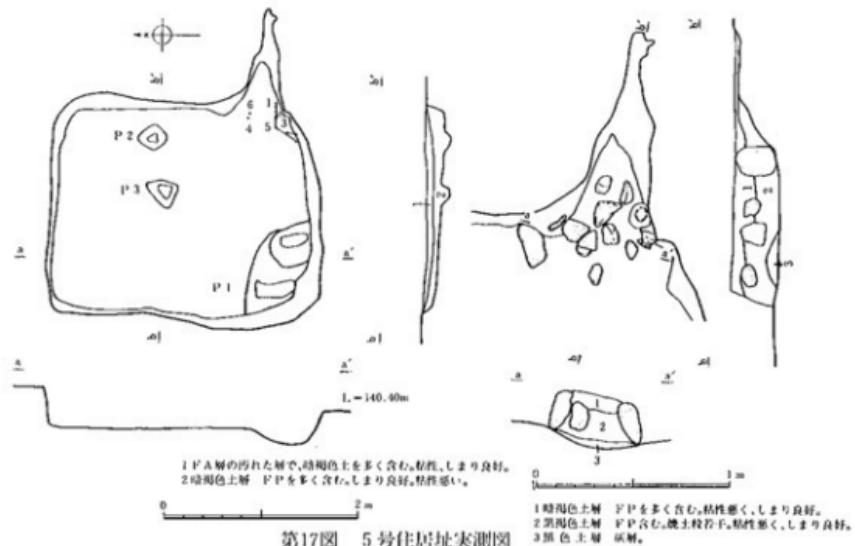
第16図 4号古住居址出土遺物実測図・拓図

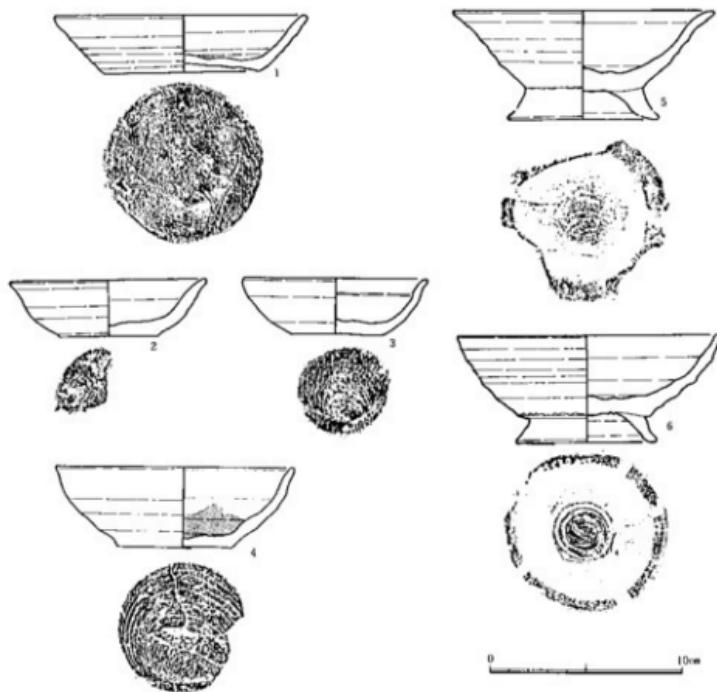
### 5号住居址（第17図、図版6-2、7-1）

本住居址はa-2、b-2区にまたがって存在し、住居址群のほぼ中央部に位置する。西へ約2mに6号住居址が、東へ約2mに1号住居址が、北へ約3.5mに4号住居址が、南へ約4mに7号住居址がそれぞれ存在する。住居址の覆土は極めて堅く締っており、他の住居址と大きく異なるが、堆積状況に変化は認められない。平面形は南北2.8m、東西2.3mの南北に長い長方形を呈し、主軸方向はN-90°-Eである。床面は標準土層第Ⅲ層中に構築されており、ほぼ平坦である。床面の硬度は全体的にやや軟弱と言える。壁は高さが確認面より20cm程度で、ほぼ直立て立ち上がる。周溝・柱穴は認められない。貯蔵穴状の土塙は住居址西南部コーナーに接してP<sub>1</sub>が存在する。P<sub>1</sub>は長径70cm、短径60cmを呈し、2つの土塙が重なったような形態である。深さは東部で床面より20cm、南部で12cm程度となる。この他に床面中央部と東部にP<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>が検出されている。P<sub>3</sub>は長径30、短径25cmの三角形を呈し、深さ10cm程度である。P<sub>4</sub>は径30cm程度の不整方形を呈し、深さ7cm程度である。

カマドは東横の南部、東南コーナーに接して設置されている。焚口から燃焼部にかけて石組みが残存しており、煙道部には認められない。この点から煙道部は素掘りのままの可能性が考えられる。掘方は壁外へ幅60cmで長さ1m掘り込んでおり、平面形はV字状となる。

遺物は極めて少なく、カマド内およびその周辺に出土したのみである。1・2・4・6はカマド内より出土している。5はカマド内と南壁に接して床面の1点と接合している。3は覆土より出土している。



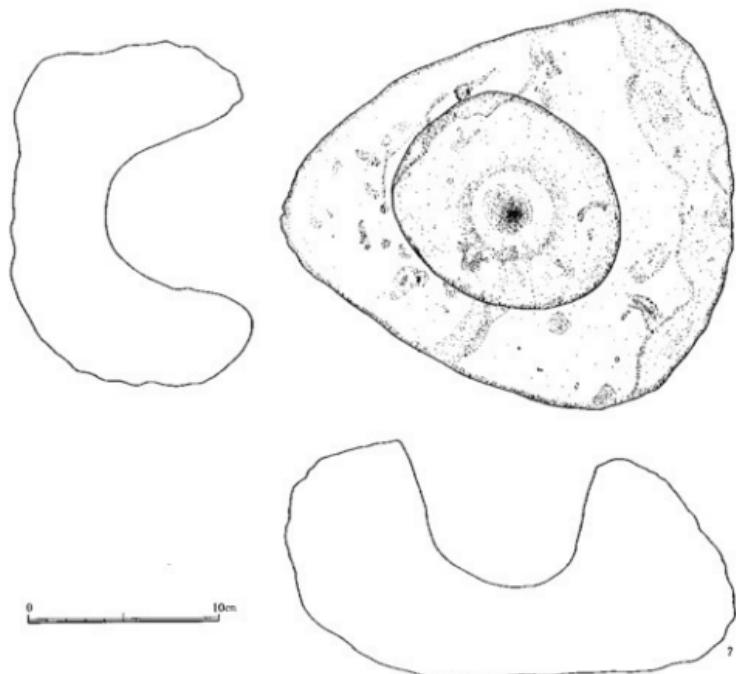


第18図 5号住居址出土遺物実測図・拓図(1)

表6 5号住居址出土遺物(1)(第18図、図版17)

(単位cm)

番号	器種	法量	器形の特徴	外面の整形	内面の整形	
1	須恵器 环	13.0 3.1 8.2	体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。大きい底盤。	底部回転糸切り未調整。右回転ロクロ整形。	右回転ロクロ整形。	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
2	环	10.3 3.0 5.1	外反する口縁部。	底部回転糸切り未調整。ロクロ整形。	ロクロ整形。	①褐色②酸化③口縁部④粗
3	环	9.6 3.0 4.8	外反する口縁部。	底部回転糸切り未調整。ロクロ整形。	ロクロ整形。	①明褐色②酸化③口縁部④欠損⑤粗
4	环	12.4 4.3 6.0	口縁部内面に沈線。口縁部若干外反。	底部回転糸切り未調整。	ロクロ整形。	①暗褐色②酸化③口縁部④欠損⑤壁含む⑥内面底盤にスス



第19図 5号住居址出土遺物実測図（2）

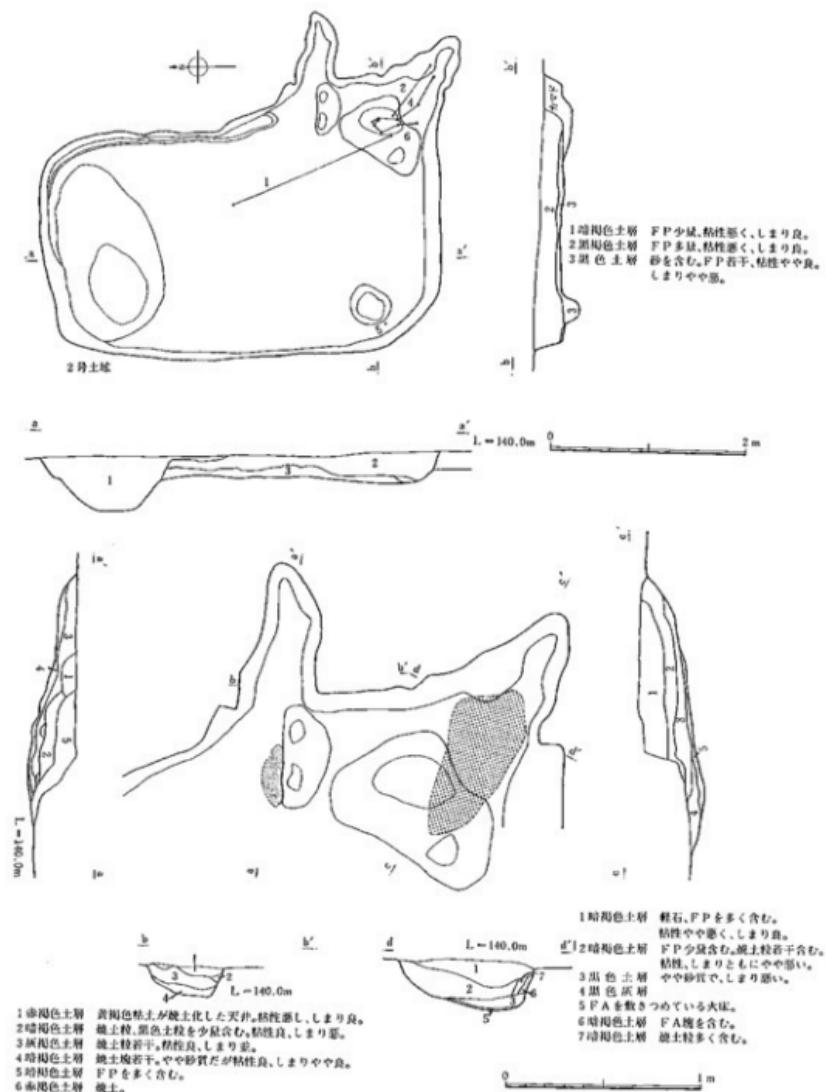
表7 5号住居址出土遺物(2) (第18・19図、図版17)  
(単位cm)

番号	器種	法量	器形の特徴	外面の整形	内面の整形	①色調②焼成③残存④ 胎土⑤備考
5	壺	13.5 5.7 7.6	口縁部大きく外反。 右回転ロクロ整形。 高い高台。	右回転ロクロ整形。 底部不明。	右回転ロクロ整形。	①暗赤褐色②酸化③口縁部～一体部欠損④壁を 多く含む。
6	壺	13.6 5.7 7.2	丸い体部。 高い高台。	左回転ロクロ整形。 底部不明。	左回転ロクロ整形。	①暗褐色②酸化③口縫部欠損④密
7	石製品		浮石安山岩製。中央部に円形の孔がある。			

6号新住居址 (第20図、図版7-2、8-1・2)

本住居址は調査区東部のb-1区に位置し、6号古住居址を切り、2号土塙および畝状遺構

により切られている。また、東へ約1mに2号溝が走っている。確認面は標準土層第II層である。



第20図 6号新住居址実測図

る。壁は確認面より高さ30cmで、ほぼ直立する。また、南壁は6分古住居址覆土よりなる。床面はほぼ平坦で、全体的に軟弱である。周溝は東壁から北東コーナーまで存在し、幅5cm、深さ5cmのU字形を呈す。貯蔵穴状の土塀は西南コーナーに存在する。形態は径42cmの不整円形を呈し、深さ15cm程度である。

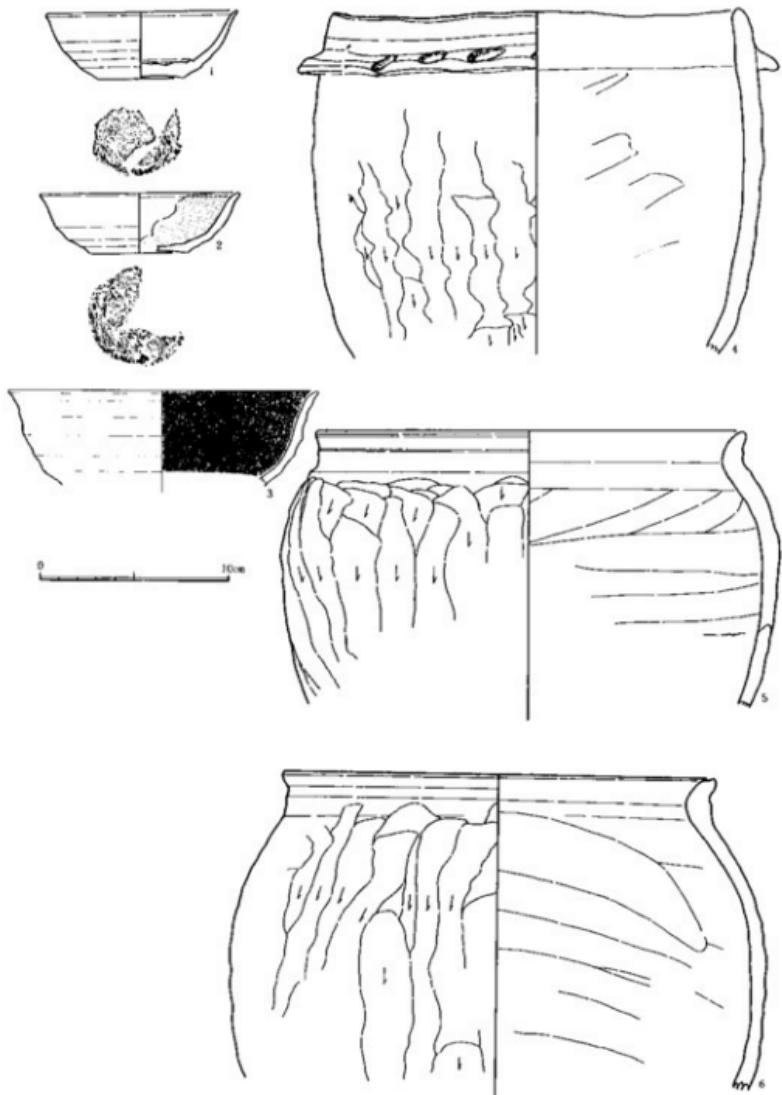
カマドは東壁の南部と南東コーナーに各1基設置されている。東壁南部のカマドは覆土中に住居址の壁が掘り込まれたような土層堆積状況が認められ、さらに東南部コーナーのカマドから出土した遺物が住居址床面の遺物と接合することより、東壁南部のカマドが構築廃棄された後に、東南コーナーのカマドが構築されたと考えられる。東壁南部のカマドは壁外へ幅40cm、長さ75cm掘り込んで構築されている。また、カマドの西南部は東南コーナーのカマド構築の際に破壊されたと思われ、変形している。袖は検出されず、他の住居同様に石組みと考えられる。煙道は細長く延びており、ゆるやかな傾斜をもって立ち上がる。燃焼部の床面にはFA(標準土層第II層)が長さ40cm、幅10cmの範囲に敷かれている。厚さは1cm程度で、熱による赤色化は認められない。東南コーナーのカマドは壁外へ幅50cm、長さ70cm程度掘り込み構築されており、東壁南部のカマドとはほぼ同じ構造である。袖は検出されず、石組みと考えられる。煙道は長く延びており、ゆるやかな傾斜をもって立ち上がる。燃焼部の床面にはFA(標準土層第II層)が長さ87cm、幅39cmの範囲に敷かれている。厚さは2cm程度で、熱による赤色化は認められない。

遺物はやや多く出土しており、住居址内全面に分布する。1はカマド内と床面中央部とが接合している。2・4・6はカマド内より出土している。3は覆土出土である。5は住居南西コーナー床面より出土している。

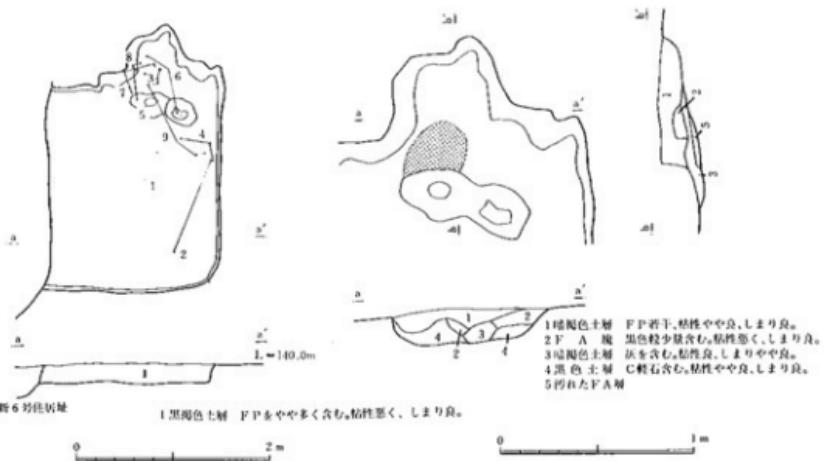
表8 6号新住居址出土遺物(第21図、図版17)

(単位cm)

番号	器種	法量	器形の特徴	外面の整形	内部の整形	①色調②焼成③残存④ 胎土⑤備考	
1	环	10.2 3.5 4.6	口縁部外反。 底部回転系切り未 調整。右回転ロク ロ整形。	右回転ロクロ整 形。	①明赤褐②酸化③ 密、疊多い		
2	环	10.5 3.2 5.7	口縁部外反。 底部回転系切り未 調整。右回転ロク ロ整形。	右回転ロクロ整 形。	①暗褐色②酸化③ 密、疊多し④スヌ付着		
3	环	16.2 — —	口縁部外反。 ロクロ整形。	ロクロ整形。	①外面黄褐色内面黒色 ②酸化③④砂質⑤内 黒		
4	土師器 羽釜	21.2 — —	口縁部が短く、 口唇部丸い。	口縁部横撫で。脣 部上から下への削 り。鋼錐な貼り付け。	口縁部横撫で。脣 部横位の撫で。	①赤褐色②酸化③脣上 部～口縁部④疊多し	
5	土師器 釜	22.2 — —	口縁部が短く、や や外反気味となり、 中位に稜をもつ。 脣部は上位に最大 径をもつ。	口縁部横撫で後、 脣部を上から下へ の削り。	口縁部横撫で。 横位の撫で。	①暗赤褐②酸化③口縁 部～脣上部④疊む。	
6	土師器 土釜	22.4 — —	口縁部が短く、や や外反気味となり、 中位に稜をもつ。 脣部は上位に最大 径をもつ。	口縁部横撫で後、 上から下への削り。	口縁部横撫で。 脣部を斜位の撫 で。	①暗赤褐②酸化③口縁 部～脣上部④疊⑤壁を 含む。	



第21図 6号新住居址出土遺物実測図・拓図



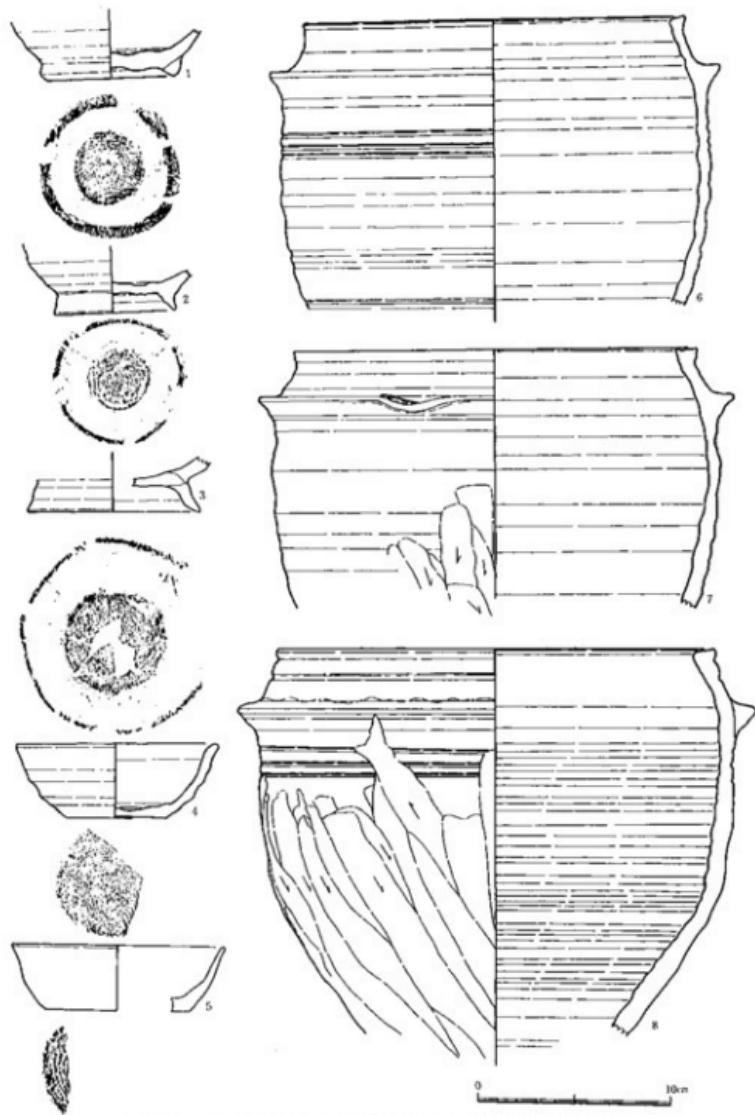
第22図 6号古住居址実測図

### 6号古住居址（第22図、図版9-1・2）

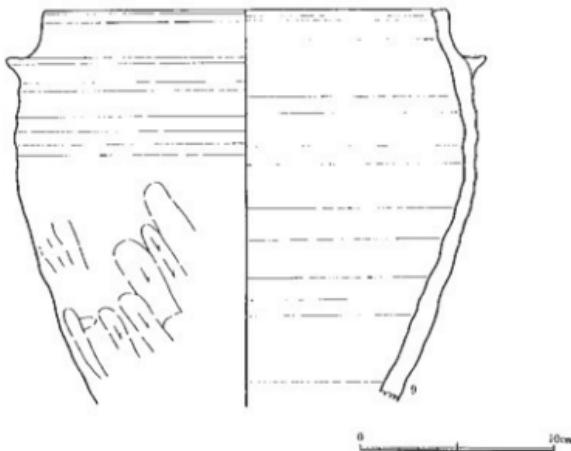
本住居址は調査区西部のb-1区に位置し、6号新住居址、畠状造構により切られている。また、東側に2号溝が、西南約2mに7号住居址が、東南約2mに3号土塁がそれぞれ存在する。確認面は標準土塁第II層である。平面形は北部を6号新住居址により削平されているため不明であるが、長方形が推定できる。規模は南北が1.8m以上、東西が2.1m、主軸方向はN-90°-Eである。床面は標準土塁第II層中に構築され、ほぼ平坦である。床面の硬度は全体的に軟弱である。周溝・柱穴等は検出されていない。

カマドは東壁の南端に設置されている。カマドの掘り方は壁を幅65cm、長さ55cmの方形に掘り込んでいる。煙道部は先端で直立して立ち上がる。燃焼部底面には焼土が25×30cmの範囲に堆積しており、その前に浅い土塁が存在する。この土塁は長径68cm、短径26cmの不整形を呈し、深さ10cm程度である。

遺物は住居址の東半部に集中しており、特にカマドおよびその周辺に多く出土している。1は住居址中央覆土中より出土している。2は住居址西部の覆土中より出土している。3はカマド内より出土している。4は住居址東南部の覆土および床面より出土している。5はカマド正面の土塁覆土上面より出土している。6・7・8はカマド内より出土している。9はカマド内および住居址東南の床より出土している。



第23图 6号居住址出土遗物实测图·拓图(1)



第24図 6号古住居址出土遺物実測図(2)

表9 6号古住居址出土遺物(第23・24、図版18)

(単位cm)

番号	器種	法尺	器形の特徴	外面の調整	内面の調整	
1	塊	—	低い高台。丸い体部。	底部回転糸切り未調整。右回転ロクロ整形。	右回転ロクロ整形。	①色調②焼成③残存④胎土⑤縫合
		6.6				①黒褐色②酸化③底部④砂質
2	塊	—	高い高台。丸い体部。	底部回転糸切り未調整。右回転ロクロ整形。	右回転ロクロ整形。	①暗褐色②酸化③底部④砂質
		6.2				
3	塊	—	高い高台。	底部撫で。ロクロ整形。	ロクロ整形。	①黄褐色②酸化③底部④砂質⑤底部外面にスヌ
		9.0				
4	环	10.4	若干外反する口縁部。	底部糸切り未調整。右回転ロクロ整形。	右回転ロクロ整形。	①明赤褐色②酸化③火④砂質
		3.9				
		5.2				
5	环	11.2	若干外反する口縁部。大きな底部。	底部回転糸切り未調整。ロクロ整形。	ロクロ整形。	①赤褐色②酸化③火④砂質
		3.4				
		7.6				
6	羽釜	19.8	内湾する口縁部。三角形の鶴。	ロクロ整形。	ロクロ整形。	①灰白色②環元③胴上部～口縁部④密
		—				
7	羽釜	21.0	口縁部に沈線。	ロクロ整形後、斜下部に粗粒の削り。	ロクロ整形。	①明赤褐色～灰白色②環元～酸化③口縁部④密
		—				
		—				
8	羽釜	22.6	口縁部肥厚。やや丸味を帯びた鶴。	ロクロ整形後、斜位の削り。	ロクロ整形。	①褐色②酸化③火④密
		—				
		—				
9	羽釜	21.0	内湾する口縁部。	ロクロ整形後、斜位の削り。	ロクロ整形。	①明赤褐色～灰褐色②酸化～環元③火④疊多し
		—				
		—				

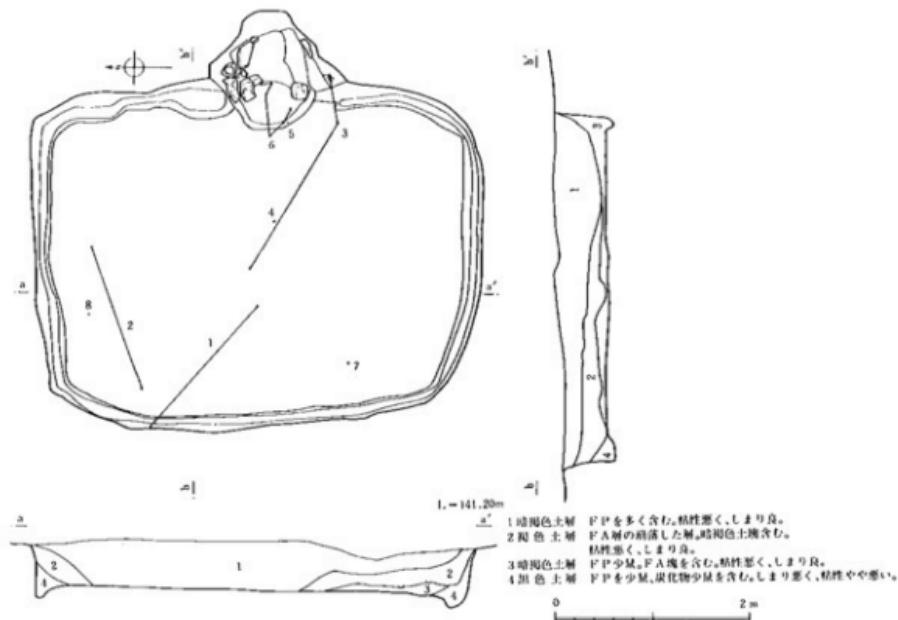
### 7号住居址（第25・26図、図版10-1・2）

本住居址は調査区中央部のb-2区南東寄りに位置し、北東に6号新・古住居址が、北西へ約2mに5号住居址が、南東約7mに10号住居址がそれぞれ存在する。確認面は標準土層第II層である。床面は標準土層第IV層中に構築されており、全体的にやや軟弱である。平面形は南北4.6m、東西3.7mの隅丸方形である。壁は比較的高く、確認面より50cmではば直線的に立ち上がる。周溝はカマド部分を除き、全周している。これはあらかじめカマド設置場所を決定した後に周溝が構築されたと思われる。形態は幅10cm前後、深さ10cm程度のU字形を呈す。

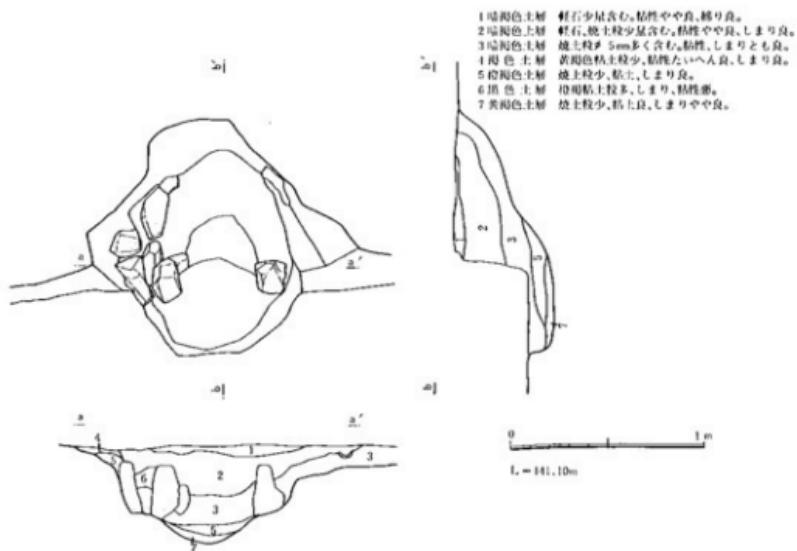
カマドは東壁中央やや南寄りに設置されている。壁外へ幅140cm、長さ90cmの土塀を掘り込み、この中に砂質凝灰岩の切石をもって焚口～煙道部を構築している。焚口は住居址の壁ライン上に位置し、前面に深さ16cm程度の土塀をもっている。燃焼部と煙道部の境にはゆるやかな段を有し、煙道部はゆるやかに立ち上がる。

段を有し、煙道部はゆるやかに立ち上がる。

遺物は覆土中に多量の遺物が出土している。1・2・4は覆土出土である。3はカマドの壁に密着して出土しており、一部が覆土中より出土している。5・6はカマド内出土である。7



第25図 7号住居址実測図



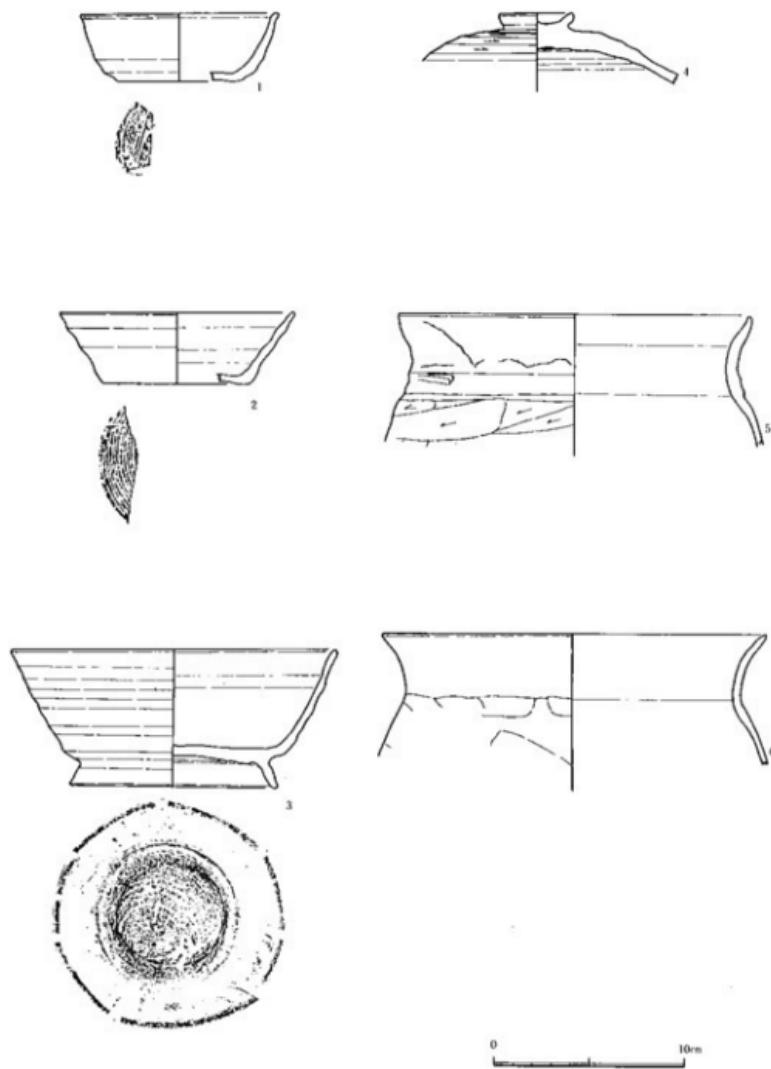
第26図 7号住居址カマド実測図

・8は床面より出土している。

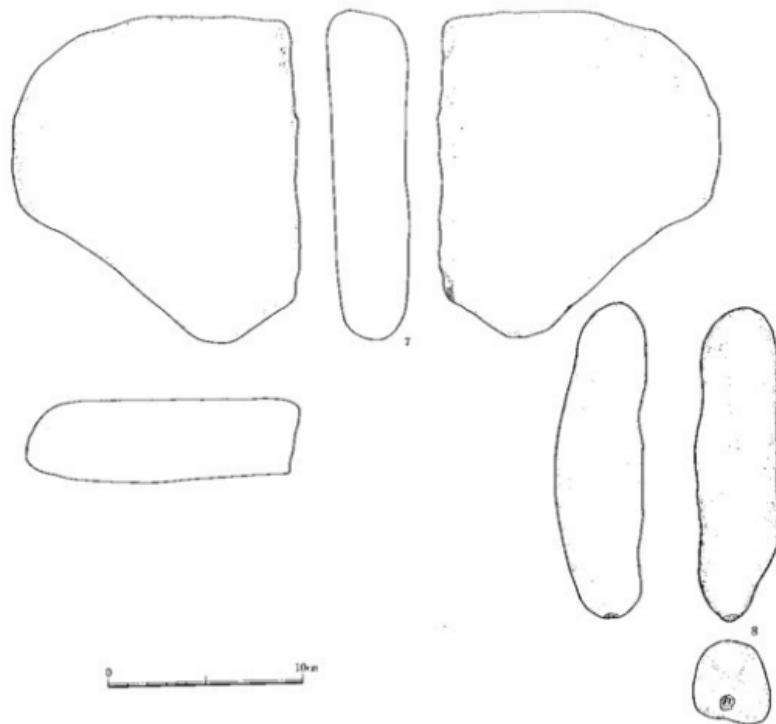
表10 7号住居址出土遺物（第27・28、図版18・20）

(単位cm)

番号	器種	法量	器形の特徴	外面の整形	内面の整形	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
1	須恵器 环	10.4 3.6 6.4	口唇部肥厚外反。 やや直線的に立ち上る 体部。	底部回転系切り未 調整。ロクロ整形。	ロクロ整形。	①灰色②環元③口④密
2	須恵器 环	12.2 3.8 7.6	直線的に立ち上る 体部。	底部回転系切り未 調整。ロクロ整形。	ロクロ整形。	①黄灰色②環元軟質③ 口④密
3	土師器 塊	17.1 7.3 5.8	直線的に立ち上る 体部。高い高台。	底部回転系切り。	ロクロ整形。	①赤褐②酸化③口縁部 口欠損④密
4	須恵器 蓋	— — —	鉢は凹状をなし、 中央部がわずかに 凸状をなす。	天井部ロクロ整形 後、右回転ロクロ による削り。	右回転ロクロ整 形。	①灰色②環元③口縁部 欠損④密
5	土師器 甕	18.4	口縁部くずれたコ の字。口唇部内湾 気味。	口縁部横撫で、削 部右から左への 削り。	口縁部撫で。削 部撫で。	①赤褐②酸化③口縁部 口④疊多し。
6	土師器 甕	20.2 — —	口縁部ゆるく外反。	口縁部横撫で。削 部削り。	口縁部横撫で。削 部撫で。	①赤褐②酸化③口縁部 口④砂質
7	台石	—	表面に磨耗痕をもち、やや光沢を有す。	—	—	—
8	叩石	—	細長い礫を用い先端に打痕。	—	—	—



第27図 7号住居址出土遺物実測図・拓図(1)



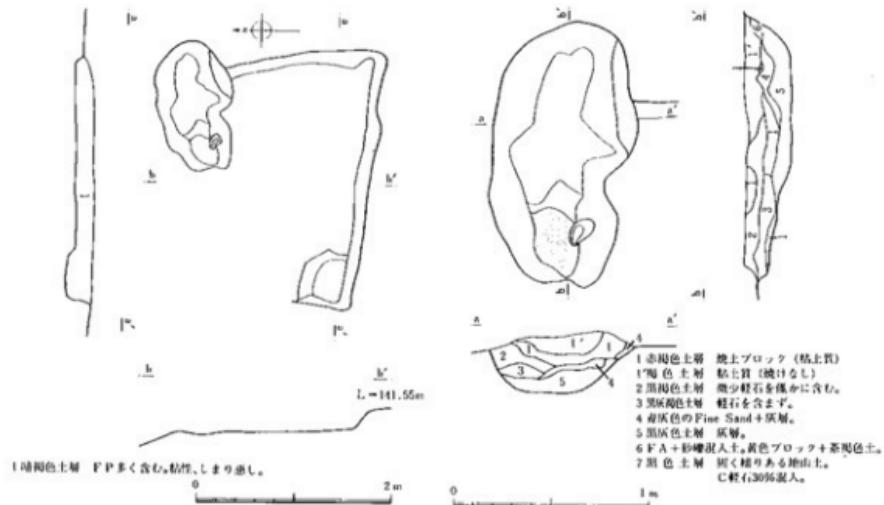
第28図 7号住居址出土遺物実測図（2）

#### 8号住居址（第29図、図版11-1・2）

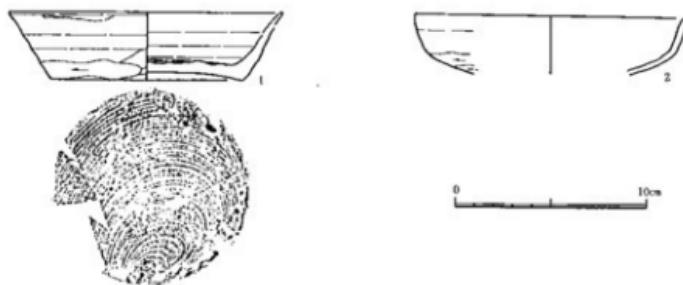
本住居址は調査区西部のa-3・4、b-3・4区にまたがって存在する。北東へ約2mに2号住居址が存在する。確認面は標準土層第Ⅱ層であるが、住居址北部はすでに標準土層第Ⅳ層まで削平されて消失している。平面形は方形もしくは長方形が推定される。規模は南北2.2m以上、東西2.6mで、主軸方向がN-90°-Eである。床面は標準土層第Ⅲ層下部に構築されており、ほぼ平坦である。床面の硬度は全体的に軟弱である。壁は5cm前後で直立して立ち上がる。貯蔵穴状の土壙は住居址西南部に存在し、径60cm程度の方形を呈し、深さ10cmである。

カマドは東壁に設置されている。燃焼部は火床面の存在により壁内に存在したと思われる。袖は検出されず、他の住居址同様、石組みと考えられる。煙道部は半円形の平面をもち、先端で急激に立ち上がる。

遺物は極めて少ない。1・2ともに床面である。



第29図 8号住居址実測図

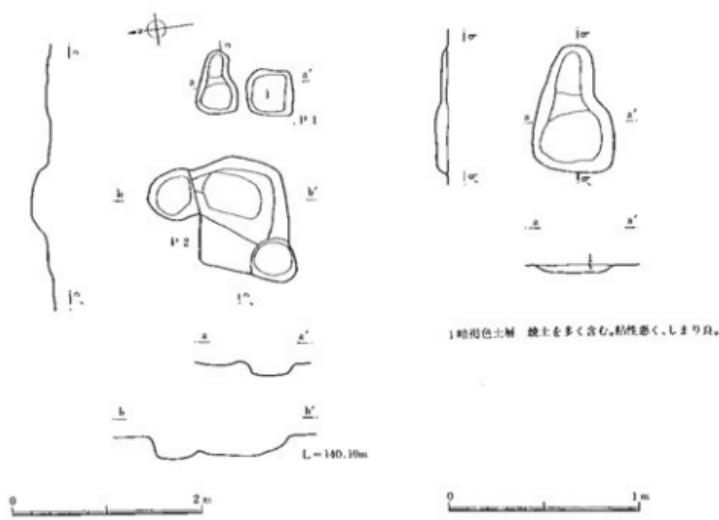


第30図 8号住居址出土遺物実測図・指図

表11 8号住居址出土遺物 (第30図、図版11-1・2)

(単位cm)

番号	器種	法量	器形の特徴	外面の整形	内面の整形	
						①色調②焼成③残存④胎土
1	須恵器 环	14.3 3.6 10.0	直線的に立ち上がる口縁部。大きな底部。	底部回転糸切り未調整。右回転ロクロ彫形。左から右への手持ち削り。	右回転ロクロ彫形。	①黄灰色②環③口縁部欠損④密
2	土師器 环	14.2 — —	丸い体部。	口縁部横撫で。体部削り。	撫で。	①赤褐色②酸化③口④粗

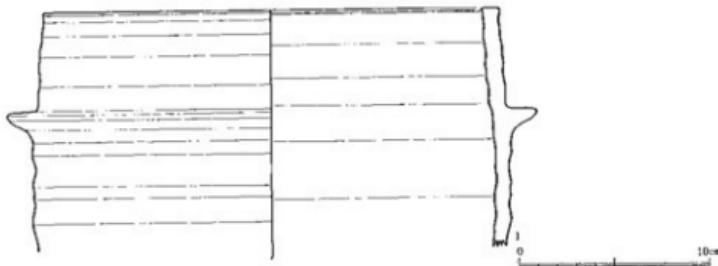


第31図 9号住居址実測図

#### 9号住居址（第31図、図版12-1）

本住居址は調査区北西部a-2区に位置し、西へ50cm程度に4号古住居址が存在する。確認面は標準土層第Ⅱ層であるが、削平が著しくカマドおよび住居内の土塙を残すのみである。床面・壁は削平のため不明である。P<sub>1</sub>は貯蔵穴状の土塙で、50×45cmの方形を呈する。P<sub>2</sub>は不整形を呈する。カマドは底面を残すにしかすぎない。

遺物はP<sub>1</sub>覆土より出土している。

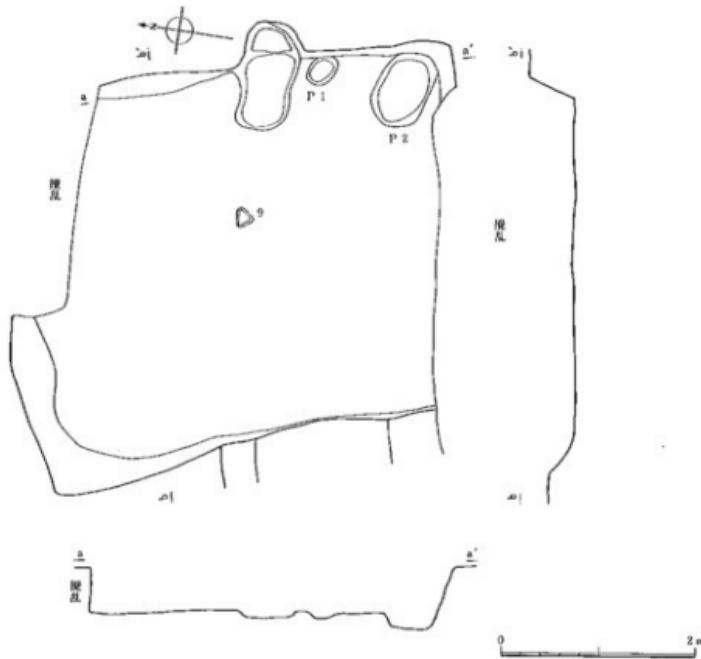


第32図 9号住居址出土遺物実測図

表12 9号住居址出土遺物（第32図、図版19）

(単位cm)

番号	器種	法量	器形の特徴	外面の整形	内面の整形	①赤褐色②焼成③残存④胎土
1	甌	24.0	長く直立する口縁部。	ロクロ整形。	ロクロ整形。	①赤褐色②焼成③口縁部～胴部④胎土



第33図 10号住居址実測図

## 10号住居址（第33図、図版12-2、13-1）

本住居址は調査区東南部c-1区に位置し、1号溝および2号溝により覆土を切られる。また、北壁東半部および南壁は擾乱により削平される。確認面は標準土層第II層である。平面形は南北3.9m、東西4.9mの長方形を呈し、主軸方向はN-73°-Eである。壁は確認面より45cm程度で、ほぼ直立するが、西壁北部ではゆるやかな立ち上がりとなる。床面は標準土層第IV層で、ほぼ平坦である。貯藏穴状の土塗はカマド脇よりP<sub>1</sub>が、東南コーナーよりP<sub>2</sub>がそ

それぞれ存在する。P<sub>1</sub>は径28cmの円形を呈し、深さ5m程度である。P<sub>2</sub>は長径80cm、短径52cmの楕円形を呈し、深さは15cm程度である。

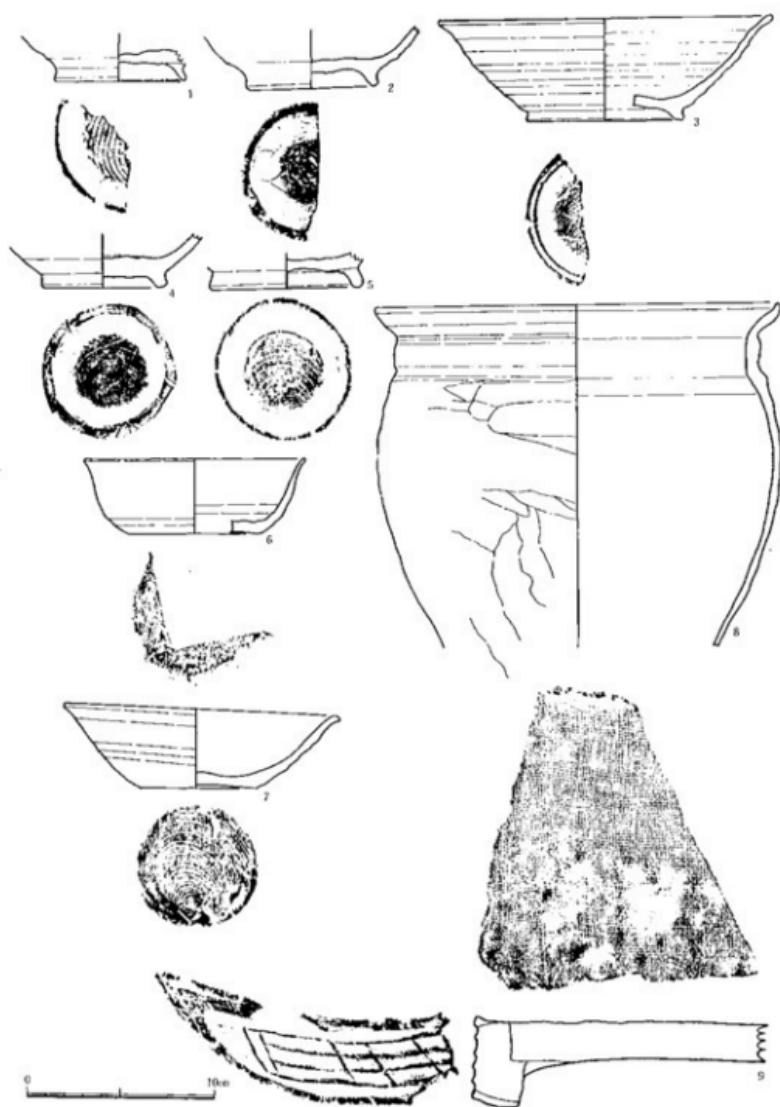
カマドは東壁中央部に設置されており、上部は2分溝により削平されている。袖は検出されていない。煙道部は壁外に掘り込まれており、長さ40cmの半円形を呈する。立ち上がりは下部を残すのみで、不明である。カマド前面には深さ5cm程度の浅い楕円形を呈す土塙が存在している。

遺物は覆土中およびカマド、土塙内より多量に出土している。1・2・4・6・7・9は覆土中より出土している。これらの遺物は床面より10cm程度の高さに集中していた。9は住居址中央部の床面より5cm程度高い覆土中より出土している。3は土塙P<sub>2</sub>より出土しており、一部が住居址覆土より出土している。5は土塙P<sub>2</sub>より出土している。8は大部分の破片がカマド内に集中していたが、一部が住居址覆土より出土した。

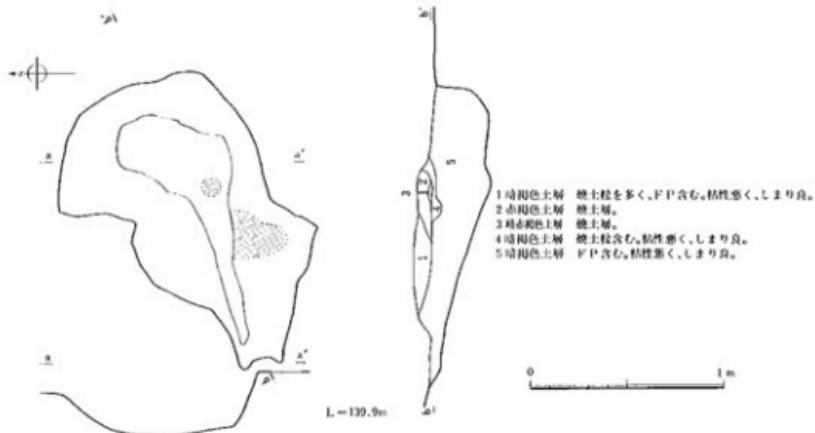
表13 10号住居址出土遺物（第34図、図版19）

(単位cm)

番号	器種	法寸	器形の特徴	外面の整形	内面の整形	①色調②焼成③残存④胎土
1	須恵器 壺	— — 6.9	高台を有す。	底部回転糸切り未調整。右回転ロクロ整形。	右回転ロクロ整形。	①灰白色②環元③底部④繊多し
2	須恵器 壺	— — 6.6	高台を有す。	底部回転糸切り未調整。回転ロクロ整形。	回転ロクロ整形。	①外面灰白色 内面灰色 ②環元③底部④粗
3	須恵器 瓶	17.2 5.4 8.0	外反する口縁部。	底部回転糸切り未調整。回転ロクロ整形。	回転ロクロ整形。	①灰白色②環元③外④密
4	須恵器 壺	— — 6.4	高台を有す。	底部回転糸切り未調整。回転ロクロ整形。	回転ロクロ整形。	①灰白色②環元③底部④密
5	壺	— — 7.4	高台を有す。	底部回転糸切り未調整。右回転ロクロ整形。	右回転ロクロ整形。	①褐色②酸化③底部④密
6	須恵器 环	11.6 4.0 6.8	若干外反する口縁部。	底部不明。ロクロ整形。	ロクロ整形。	①灰色②環元③外⑤自然釉付着
7	須恵器 环	14.4 4.5 6.2	外反する口縁部。	底部回転糸切り未調整。ロクロ整形。	ロクロ整形。	①赤褐色②酸化③外④密
8	土師器 甕	20.8 — —	コの字口縁。内窪する口唇部。	口縁部横撫後、胴上部横位の削り、下部縱位の削り。	口縁部横撫で。胴部撫で。	①赤褐色②酸化③外④繊多し
9	瓦		瓦当は格子状の文様がみられる。表面は細かい。			①灰色②環元③外④密



第34図 10号住居址出土遺物実測図・拓図



第35図 11号住居址実測図

#### 11号住居址（第35図、図版13-2）

本住居址は調査区西部のa-3区に位置し、西へ約1mに3号住居址が存在する。確認面は標準土層第IV層で、すでに削平を受けておりカマドを残すのみである。カマドの保存状況はかなり悪く、形態は不明である。

遺物は復土より土器類の小片が数点出土している。

#### 12号住居址（第36図、図版14-1）

本住居址は調査区北端に位置し、住居址北部が未調査区に延びており、南部は削平を受けて存在していない。そのため、セクションによる確認にとどまった。壁は高さ35cmで直立して立ち上がり、床は標準土層第IV層とする。

遺物は出土していない。



第36図 12号住居址断面図

### 第3節 土 塚

#### 1号土塚（第13図、図版5-1）

本土塚は調査区北部のa-2区に位置し、4号新住居址の覆土を切り、構築されている。平面形は径110cmの円形を呈し、断面形は深さ15cmの皿状を成す。遺物は全く出土が見られなかつた。覆土は標準土層第II層である。

#### 2号土塚（第20図、図版1-2）

本土塚は調査区東部のb-2区に位置し、6号古住居址の覆土を切って構築されている。平面形は長径285cm、短径105cmの楕円形を呈している。底面は深さ58cmで、西部が深く、東部がだいに浅くなっている。遺物は少量の土師器片が出土している。

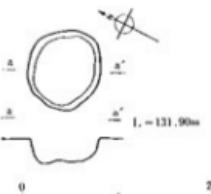
#### 3号土塚（第37図、図版14-2）

本土塚は調査区東部のb-2区に位置する。確認面は標準土層第II層である。平面形は径40cmの円形を呈し、深さ25cmである。覆土は単一土層で暗褐色土層である。遺物は数点の土師器小片が出土している。

### 第4節 溝

#### 1号溝（第38図、図版15-1）

本溝は調査区南部のc-1・2区に存在する。ほぼ東西に延びており、西部は搅乱により削平を受け、東部は未調査区に延びる。断面形は幅190cmのU字形を呈し、深さは東へ向うにつれて深くなっている。覆土は暗褐色土（粘性悪く、縮りもやや悪い。）である。遺物は覆土中より多数出土しており、土師器・須恵器を主体とし、この他に常滑や埴輪片が出土している。



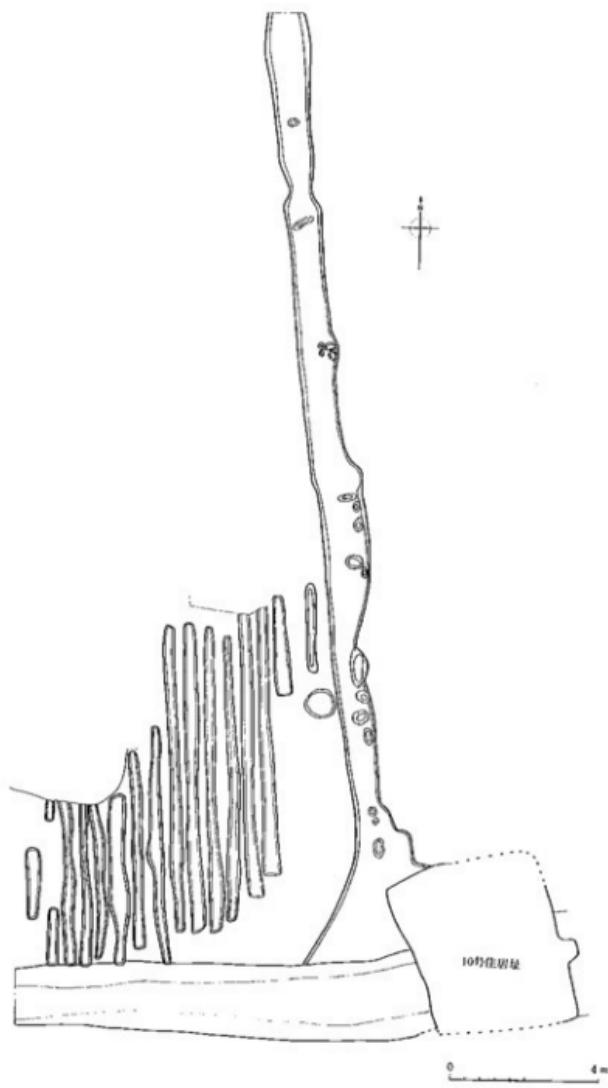
第37図 3号土塚実測図

#### 2号溝（第38図、図版15-2）

本溝は調査区西部のa・b・c-1区にまたがり存在し、その南部で1号溝と交じわる。1号と2号の関係は不明であるが、覆土中より陶磁器片が出土していることから、ほぼ同時期の所産と考えられる。幅60-120cmで、底面は平坦である。また深さ10-20cmの小ビットが乱雑に検出されている。覆土は1号溝と全く同質の暗褐色土である。遺物は少量出土している。

#### 溝出土遺物（第39図）

1-3はいづれも1号溝出土遺物である。1は埴輪の底部片である。内外面ともに1次調整の縦ハケのみである。2は須恵器片である。外面は平行叩き目、内面は同心円当て目がある。



第38図 1・2号溝・畝状造構実測図



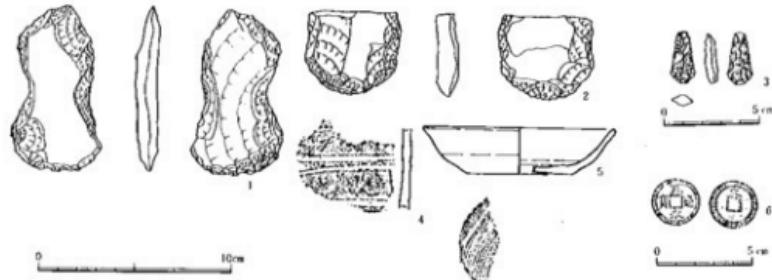
第39図 溝出土遺物実測図・拓図

### 第5節 砍状遺構 (第38図)

調査区南部の1号溝、2号溝と7号住居址に囲まれて検出された。砍は16条存在し、幅10~30cmで、深さ5~10cmである。西端の砍覆土上面より寛永通宝(第40図6)が出土しており、近世以後と考えられる。

### 第6節 調査区内の遺物 (第40図)

1と2は石斧である。1は8号住居址覆土出土である。中央部がややくびれる分銅形を呈する。2は1号住居址覆土出土である。刃部のみで、基部を欠損する。3は有茎石鏃である。先端部と莖部を欠損する。チャート製である。4は縄文式土器である。沈線がみられる。6は砍状遺構より出土した寛永通宝である。



第40図 調査区内出土遺物実測図・拓図

## 第5章 まとめ

本発掘において平安時代の集落址が検出された。これらの遺構・遺物の内、土器編年、羽釜の整形技法と形態、カマド、磨石の4点について取り上げ、若干の論考を加えてまとめに替える。

### 1. 編年の位置づけ

本遺跡では遺物出土量が少ないため、独自の編年を組むことはできない。けれども、本遺跡の同一水系上に位置する清里・陣場遺跡においては同時期の集落址が調査され、報告の中で編年が論考（註1）されている。この編年と照合して本遺跡土器群を位置づけてみたい。

#### 7・8号住居址

両住居址ともに体部が直線的に立ち上がり、底部が回転糸切り未調整の須恵器壺が出土している。また、7号住居址ではコの字口縁の壺が出土している。以上の2点より清里・陣場遺跡第1期に相当すると思われるが、8号住居址の壺は底径の大きいことよりさらに1段階古い可能性がある。

#### 10号住居址

高台をもつ須恵器の塊の存在、須恵器壺の酸化・軟質化、土師器壺のコの字口縁の明瞭化より清里・陣場遺跡第2期と考えられる。

#### 1・2・4号新住居址

高台をもつ須恵器塊、土師質土器の塊、羽釜の存在より清里・陣場遺跡第3期と考えられる。

#### 5・6号住居址

各住居址ともに小形の土師質土師器、清里・陣場遺跡土師質土器塊Aが出土しており、5・6号住居址では高い高台をもつ土師質土器塊をもつことから、清里・陣場遺跡第4期に相当すると考えられる。

#### 6号新住居址

内面黒色処理の塊および土釜が清里・陣場遺跡第32号住居址出土例に類似することより、清里・陣場遺跡第5期と考えられる。

以上が編年の位置づけがなされた住居址だが、この他の住居址は遺物出土量が少ないと不明である。また、本遺跡の土器変遷は清里・陣場遺跡にはほぼ一致する。

### 2. 羽釜の整形技法と形態

まず、本遺跡における羽釜の整形技法には大きく2類型の存在が指摘できる。両者の差は口

クロ整形の有無により分けられる。Ⅰ類ロクロ整形後、部分的に上から下への削りを施す。Ⅱ類ロクロ未使用で、胴部に縱位の削りを施す。本遺跡においてはⅠ類が主体となっており、Ⅱ類は2点のみである。Ⅰ類とⅡ類との関係は本遺跡6号古住居址（Ⅰ類出土）が6号新住居址（Ⅱ類出土）により切られることから、Ⅱ類が新しくなる。しかし、本例のみから判断することは無理があり、また荒川正男氏によりロクロ未使用の羽釜をロクロ使用羽釜よりも古く考えられている点（註2）と矛盾する。そこで、両類の時間的関係について周辺の遺跡を含めて考えてみたい。Ⅰ類が主体的に出土した遺跡として、本桜ヶ丘遺跡、清里陣場遺跡が上げられる。Ⅱ類では戸田東遺跡（註3）、大竹遺跡（註4）、中土遺跡（註5）が上げられる。これら各遺跡の存続時期等には多少の差が存在し、各遺跡を清里・陣場遺跡の編年に照し合せてみると次のようになる。

桜ヶ丘遺跡は清里・陣場遺跡第3期から第5期に当る土器群が出土しており、特に4期に伴う羽釜が主体となっている。清里・陣場遺跡では第1期から第6期まで存在するが、特に第3期から第4期に属する資料が多い。以上がⅠ類を主体とする遺跡の状況である。次にⅡ類であるが、戸田東遺跡では須恵器蓋やコの字型が伴出する例が見られ、また高台付の須恵器塊や直線的に立ち上がる体部をもつ須恵器環より陣場・清里遺跡第2期～第3期の様相が見られており、大竹遺跡でも同様な傾向である。ところが、中土遺跡では羽釜の出土した住居址5軒中4軒に器高2.5cm以下の小形の土師質土器环が出土しており、清里・陣場遺跡第6期に相当する。このようにⅡ類は羽釜出現期と終末期において認められ、さらに両者を比較すると箆削りに施文方向の差が存在する。つまり出現期の羽釜は下から上への削りが行なわれており、終末期の例は上から下への削りが行なわれている。以上をまとめるとロクロ未使用（Ⅱ類）で下から上へ削り→ロクロ使用（Ⅰ類）上から下への削り→ロクロ未使用（Ⅱ類）上から下への削りといった整形技法の流れが推考でき、桜ヶ丘遺跡6号古・新住居址の重複関係も肯定することができる。

次に羽釜の口径値について検討する。桜ヶ丘遺跡の羽釜口径値は最小18cmから最大22.6cmの範囲に分布し、比較的まとまりがある。他の遺跡の羽釜口径値と比較してみると、若干の相異が認められる。例えば、戸田東遺跡では最小11.2cm、最大28.3cmであるが、22点中18点が16cmから19.4cmに集中し、同様に大竹遺跡では最小14.5cm、最大22.4cmであるが、20点中18点が14.5cmから18.8cmに集中している。両遺跡の羽釜口径値はともに桜ヶ丘遺跡よりも相対的に小さい傾向が認められる。これに対して、中土遺跡では最小20.6cm、最大24cmの範囲にまとまりをもって分布し、桜ヶ丘遺跡よりも相対的に大きいと言える。この口径値の差は先に整形技法で示したように中土遺跡自体が羽釜の存在する時期でも相対的に終末期が多いこと、さらに戸田東、大竹両遺跡は羽釜出現期と思われることから、口径値法量が小から大へ変化したことが推定できる。その点から本桜ヶ丘遺跡の羽釜は羽釜伴出時期でも最も発達した時期と言える。

これまで本桜ヶ丘遺跡の羽釜を問題の糸口にして、整形技法と口径値の変化について触ってきた。本稿において羽釜の整形技法と口径値の時期的な変遷のみを問題としたが、さらに形

態に関する詳細な分析を行なうことにより多くの時期的変遷を見い出される可能性を示めすことができると思われる。また、口径値の変化はその機能の問題に大きく係わると思われ、その意味について今後の課題としたい。

### 3. カマド

本遺跡から検出された住居址のカマドは構築材と煙道部形態により大きく3類型できる。構築材は砂質凝灰岩を利用する場合と河原石を利用する場合がある。前者は7号住居址1軒で、後者は1・5号住居址の2軒に認められ、この他の住居址は不明である。砂質凝灰岩は本遺跡西方にある鳥羽遺跡に採掘跡（註6）が多数存在しており、本遺跡の例もその付近より運ばれてきたものと思われる。そこで本遺跡は採掘跡に近いにもかかわらず河原石を構築材として利用していることが問題となる。この点に関して、本遺跡7号住居址が9世紀代の構築であり、1・5号住居址が10世紀代の構築であることより時期的な差が想定できる。

次に煙道部の形態について触れる。本遺跡では平面形がU字形の例とV字形の例の2形態が存在する。V字形の煙道をもつカマドは5号住居址、6号古・新住居址で、出土土器から見ると清里・陣場遺跡の第4～5期に相当し、本遺跡でも新しい時期となる。つまり、煙道部はU字形平面が古く、V字形平面が新しいことが想定できる。

本遺跡におけるカマドの変遷は砂質凝灰岩を構築材とするカマド→河原石を構築材とし、煙道部平面がU字形を呈するカマド→河原石を構築材とし、煙道部平面がV字形を呈すカマドという変遷が考えられる。

### 4. 磨石

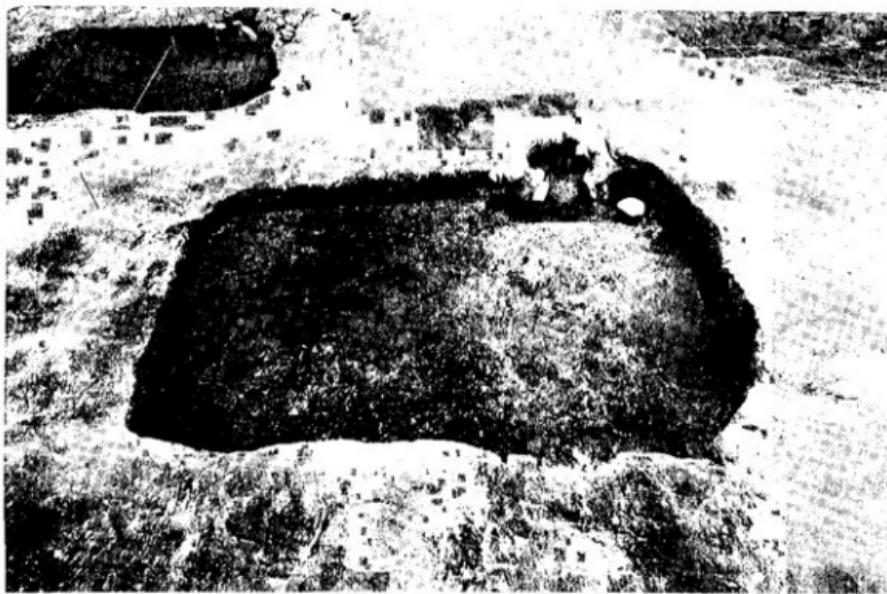
本遺跡では1・7号住居址より磨石・台石、叩き石が出土した。これらの石製品はいずれも平安時代の所産である。類似する資料は荒砥高原遺跡B区1号住居址（註7）より叩き石と磨石があり、この他にも存在するようである。磨石および台石は平坦な面にやや光沢を帯びた磨滅痕が認められ、両者はセットとして利用されたと思われる。叩き石は先端に著しい打痕があり、ややかたいものを叩き割ったような痕跡である。これらの製品の機能は不明である。しかし、本遺跡の1号住ではカマドのすぐ脇の床面より台石が出土しており、この点から食品加工の道具としての可能性が指摘できる。仮に食品加工に係わるとみる場合、叩き石、磨石、台石は生粉加工用具としての機能が推定できる。また、本遺跡周辺の地形は水田に不向きな台地部分が多く、畑作が発達していたと思われ、畑作の場合には除草あるいは収穫など考えられる。麥は近年まで関東北部において広く耕作されており、うどん等の粉食製品に加工されていた。粉食の歴史がどの程度の古さまで遡れるかが興味ある問題である。

1. 清里・陣場遺跡 1981年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
2. 大久保山I 「第2章第2節羽釜について」1980年荒川正男
3. 萩田東遺跡 1982年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
4. 関越自動車道（新潟線）月夜野埋蔵文化財発掘調査報告書「10. 大竹遺跡」1985年  
月夜野町遺跡調査会
5. 森・中Ⅰ・中Ⅱ遺跡 1983年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
6. 年報2 「鳥羽遺跡」 1983年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
7. 荒砥島原遺跡 1983年 群馬県埋蔵文化財調査事業団

# 写 真 図 版



1. 発掘終了状況



2. 1号住居址完掘状況

図版2



1. 1号住居址カマド遺物出土状況



2. 1号住居址カマド完掘状況



1、2号住居址完掘状況



2. 2号住居址カマド

图版 4



1. 3号住居址完掘状況



2. 3号住居址カマド



1. 4号新住居址完掘状况

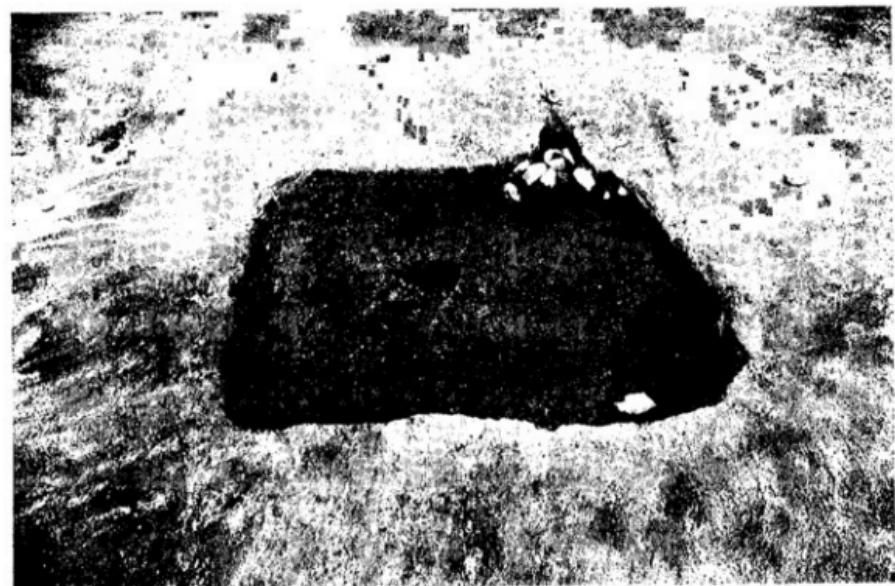


2. 4号古住居址完掘状况

図版 6



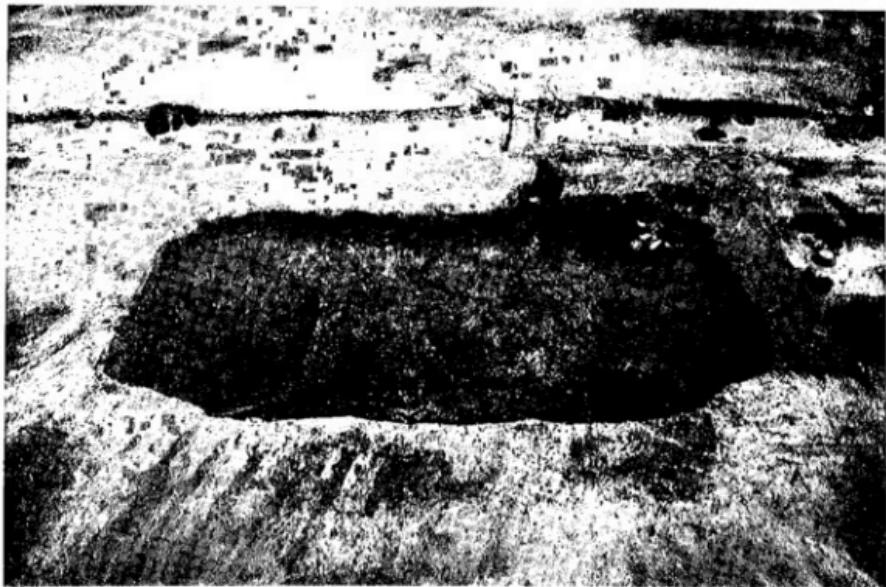
1. 4号古住居址カマド完掘状況



2. 5号古住居址完掘状況

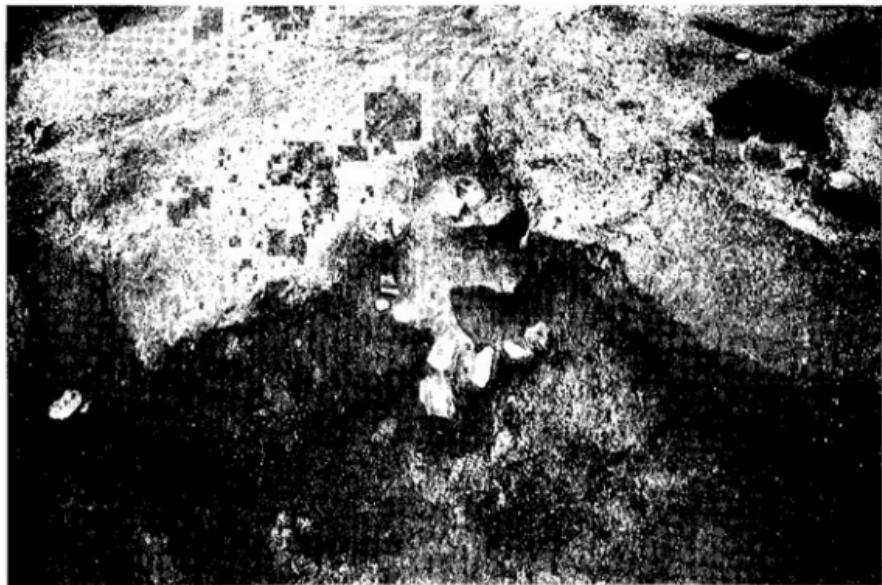


1. 5号住居址カマド



2. 6号新住居址完掘状況

図版 8



1. 6号新住居址新カマド



2. 6号新住居址古カマド

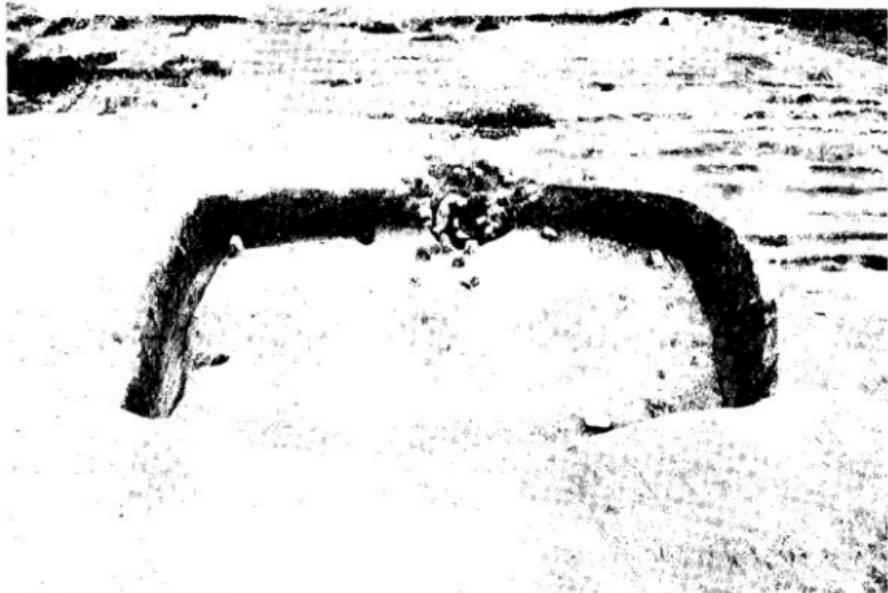


1. 6号古住居址完掘状況



2. 6号古住居址カマド完掘状況

図版10



1. 7号住居址完掘状況



2. 7号住居址カマド



1. 8号住居址完掘状況



2. 8号住居址カマド

図版12



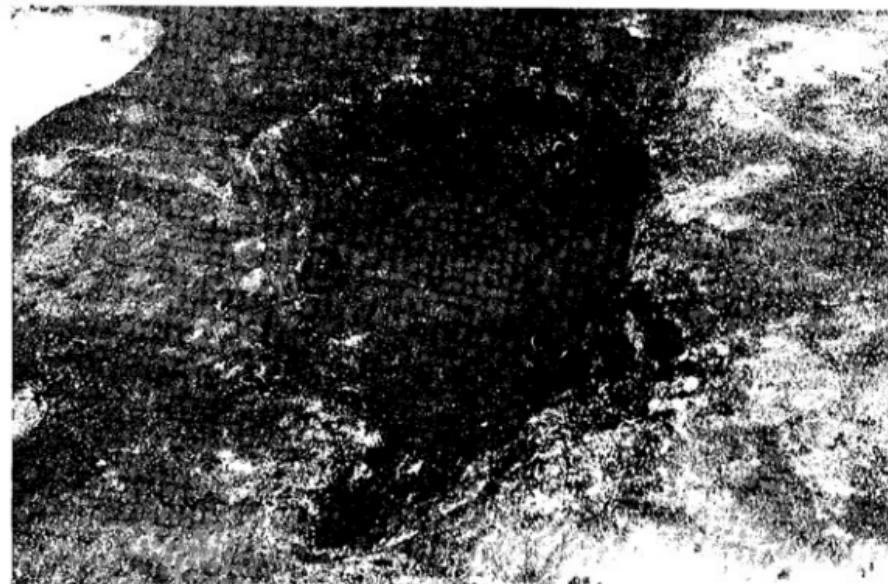
1. 9号住居址完掘状況



2. 10号住居址完掘状況

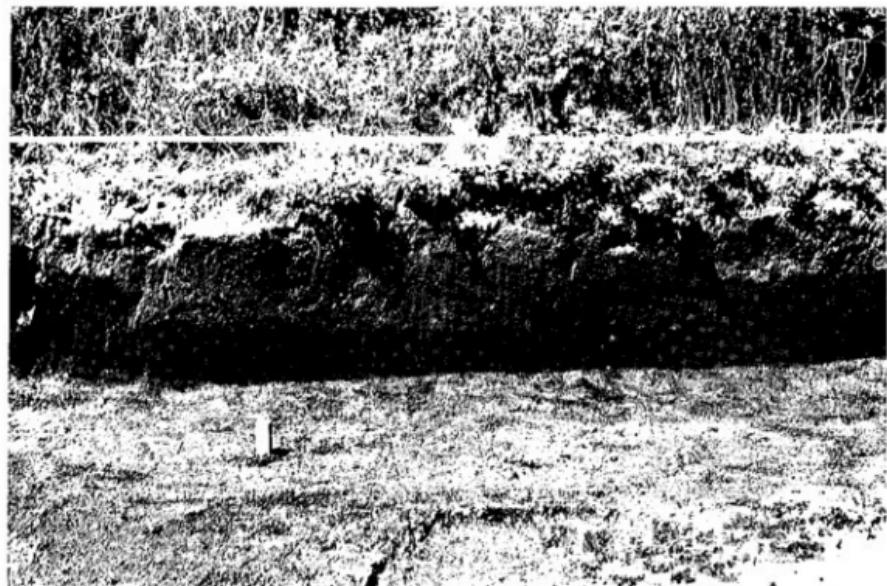


1. 10号住居址カマド完掘状況

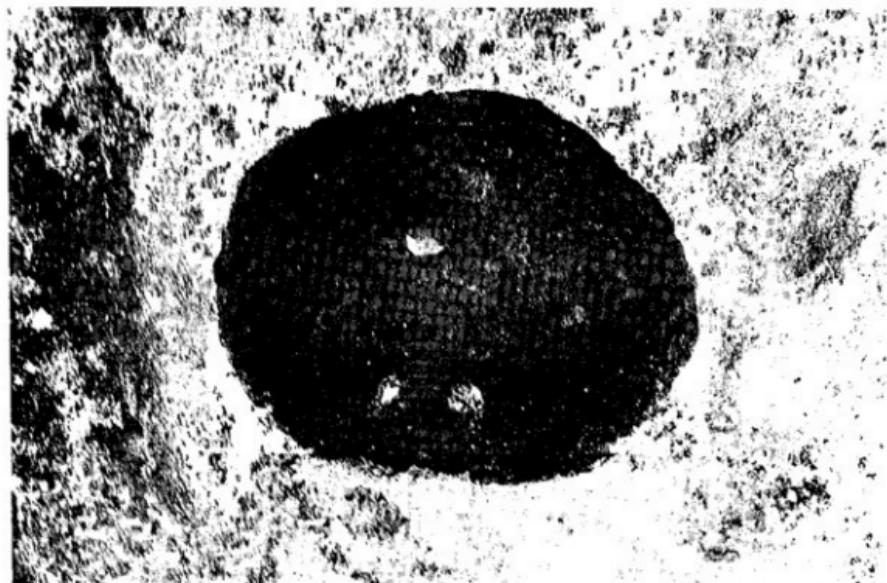


2. 11号住居址

图版14



1. 12号住居址



2. 3号土堆



1. 1号溝



2. 2号溝

図版16



1号住-2



1号住-3



1号住-4



1号住-7



1号住-5



1号住-9



2号住-1



2号住-2



2号住-4



4号新住-2



4号古住-3



5号住-1



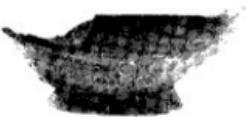
5号住-3



5号住-5



5号住-4



5号住-6



6号新住-2



6号新住-3

图版18



6号古住-2



6号古住-4



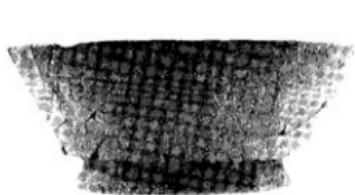
6号古住-9



6号古住-8



7号古住-4



7号古住-3



7号古住-5

6号古住居址、7号古住居址土器



9号住-1



10号住-1



10号住-6



10号住-7



10号住-4

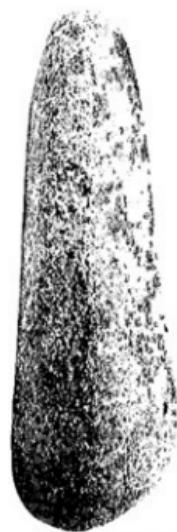


10号住-3



10号住-9

図版20



.1号住-11



2号住-6



總社桜ヶ丘遺跡

昭和60年4月1日 印刷

昭和60年4月1日 発行

編集 山武考古学研究所

発行 前橋市教育委員会

印刷 文化総合企画